

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第80輯

上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳

都市計画道路泉州山手線建設に伴う発掘調査報告書



1993

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第80輯

かみ
上フジ遺跡Ⅲ・^{み た}三田古墳

都市計画道路泉州山手線建設に伴う発掘調査報告書

1993

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

巻頭カラー図版 1



弥生集落遠景

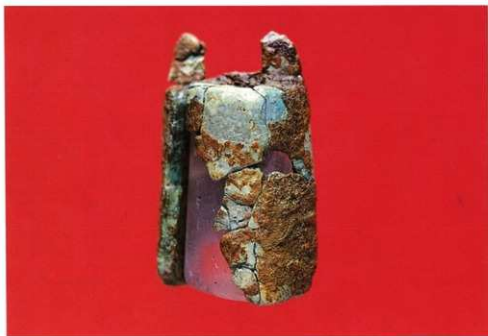


弥生集落全景

卷頭カラー図版 2



銅鐸形銅製品出土状態



同 復元



三田古墳全景



三田古墳全景



三田古墳第1主体



三田古墳第2主体



第1 主体出土三葉環頭大刀



同出土剣



第1主体出土鉄鍔



第2主体出土鉄鍔



第1 主体出土土器



第2 主体出土玉類

序 文

都市計画道路泉州山手線は、大阪府和泉市と泉佐野市を結ぶ道路として計画され、関西国際空港の開港に伴う事業の一環として、和泉市伏屋町と岸和田市三田町までの建設が急がれているところです。この路線下では、すでに和泉市池田寺遺跡の調査を実施し、多くの成果を取り報告書の刊行を終えております。

上フジ遺跡につきましては、府道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に先立って数次にわたる発掘調査を実施し、古墳時代後期の集落跡などを検出しました。今回は、その東側に隣接するフタツ池周辺や東山丘陵内を調査いたしました。

その結果、東山丘陵上で弥生時代後期の集落跡を確認しましたが、八角形を呈した住居跡から最小の銅鐸形銅製品が見つかり、新聞・テレビで報道され注目を浴びました。また併せて調査した三田古墳は直径18mの円墳でしたが、木棺直葬・横穴式石室という異なった2つの埋葬主体を持つ、極めて珍しい古墳であることが明らかとなりました。残念ながら横穴式石室はすでに破壊されていましたが、木棺直葬は後世の乱掘もなく、三葉環頭大刀をはじめ数多くの副葬品が出土しました。今回の調査成果が、当地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府土木部岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

1993年12月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
理事長 岩井幹郎

例 言

1. 本書は、都市計西道路泉州山手線建設予定地内に所在する、上フジ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 現地調査は、(財)大阪府埋蔵文化財協会調査課第1班(班長西口陽一)が実施することとなり、1991年度調査は技師・駒井正明、田中龍男が、1992年度調査は駒井がそれぞれ主に実務を担当した。なお1992年度調査では、特に岸和田市教育委員会虎間英喜氏の調査協力を得たほか、協会職員松岡良憲(現、大阪府教育委員会)、岡戸哲紀、西村 歩の協力があつた。
4. 調査期間は、初年度が1991年4月22日から1992年3月25日まで、次年度が1992年9月27日から1993年3月25日まで実施した。また整理作業は、当協会資料班を中心として駒井が行つた。
5. 調査の実施にあたっては関係諸機関をはじめ、以下の方々から多大なご教示ならびに資料提供などを得、また当協会職員の協力を得た。記して感謝の意を表する。
赤木克祝、浅岡俊夫、穴沢咏光、伊藤伸史、乾 哲也、浦上雅史、大久保徹也、岡村勝行、北野 重、工業善通、鐵 英記、小池 寛、近藤利由、白石耕治、関川尚功、武内雅人、田中清美、種定淳介、坪之内 徹、虎間英喜、中田宗伯、難波洋三、新納泉、西村尋文、日野 宏、広瀬和雄、福岡澄男、富加見泰彦、藤田忠彦、古川久雄、堀田啓一、安川豊史、行田裕美、吉村和昭(敬称略、五十音順)
6. 銅鐸形銅製品復元は奈良国立文化財研究所村上 隆氏に、三田古墳赤色顔料の分析は武庫川女子大学安田博幸・金杉直子氏にそれぞれお願いし、玉稿を頂いた。
7. 花粉分析・¹⁴C測定は川崎地質院に、プラント・オパール分析は伯古環境研究所に、熱残留磁気測定は韓夏原技研にそれぞれ委託した。
8. 遺構写真は主として上記担当者の他小倉 勝が、また遺物写真は小倉 勝、加茂幸彦が撮影した。
9. 本書の執筆、編集作業は駒井が行つた。
10. 調査、整理の過程で作成した図面類、写真、出土遺物などは、当協会で保管している。

凡 例

1. 本書に掲載した地形図、遺構実測図、その他の図に付された北方位は、全て座標北を示す。
2. 本書で使用している地区割り方法は、当協会が国土座標（第VI系）を基準に独自に設定したものであるが、本書ではそれ以外の地区呼称も使用している。具体的には本文中に記す。また座標値は全てkmを省略した。
3. 発掘調査及び本書記述のレベル高はT.P.（東京湾標準水位）+の数値を使用している。本文中ではT.P.+及びmを省略して記載した。
4. Fig. 9・16・38の断面位置は、各付図に明示した。
5. 土玉・ガラス玉の重量はすべて電子ばかりで計測した。しかし一部のガラス玉は、「0.00g」と表示したため、Tab. 4では「不測」と表記した。
6. 三田古墳出土鉄器は、すべて保存処理前に実測・写真撮影したもので、今後形状が変わる可能性がある。
7. 遺構の記号及び遺構番号は、当協会の定めた方法に従って調査を進めた。なお、遺構の記号は以下に示すとおりである。
OD：竪穴住居跡 OL：池 OO：土坑 OP：柱穴 OS：溝
OZ：水田 OX：不明・その他
8. 本書での本文、挿図、写真図版の遺構、遺物番号は全て一致する。
9. 出土遺物の諸特徴などは、遺物観察表にまとめて表示した。
10. 土層、土器の色調は、『新版 標準土色帖』7版 1987 によった。

目 次

第 I 章 調査経過とその方法	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査経過	3
第 3 節 調査・整理の方法	5
1. 調査の方法	5
2. 整理の方法	5
第 II 章 遺跡の環境	8
第 III 章 フタツ池周辺の調査	13
第 1 節 基本層序	13
第 2 節 包含層出土遺物	14
1. I 区	14
2. II～IV 区	16
3. 包含層出土遺物の組成	16
第 3 節 検出遺構と遺物	19
1. I 区	19
2. II 区	23
3. III 区	24
4. IV 区	28
第 IV 章 弥生集落の調査	32
第 1 節 東山丘陵試掘調査の概要	32
第 2 節 弥生集落の調査	36
1. 調査概要	36
2. 包含層出土遺物	37
3. 出土遺物の組成と平面分布	38
4. 検出遺構	39
5. 各住居跡出土遺物	49
6. その他の遺構・遺物	51
第 V 章 三田古墳の調査	56
第 1 節 はじめに	56
1. 三田古墳とは	56
2. 調査前の状況	56
3. 試掘調査の成果	57
4. 調査上の誤認	58
第 2 節 墳丘	58
1. 墳形	58
2. 盛土	58
3. 墳丘施設	63
4. 墳丘上及び周辺の出土遺物	65

第3節 第1主体	71
1. 墓塚掘形	71
2. 木棺	71
3. 遺物出土状況	73
第4節 第1主体出土遺物	76
1. 土器	76
2. 鉄器	79
3. 装飾品	84
第5節 第2主体	93
1. 石室掘形	93
2. 横穴式石室	93
3. 遺物出土状況	95
4. 埋葬と棺	95
第6節 第2主体出土遺物	98
1. 土器	98
2. 鉄器	99
3. 装飾品	102
4. その他	106
第7節 石室破壊と再利用	108
1. 石室の破壊	108
2. 平安時代初頭の石室再利用	109
3. 再利用に伴う出土遺物	109
第VI章 理化学的分析の成果	115
第1節 上フジ遺跡における花粉分析結果	115
第2節 大阪府、上フジ遺跡におけるプラント・オパール分析	131
第3節 上フジ遺跡における考古地磁気年代推定	137
第4節 ^{14}C 年代測定値について	151
第5節 上フジ遺跡出土小銅鐸の材質・構造調査と保存処理について	152
第6節 岸和田市三田古墳の木棺直葬の主体部に残存した赤色顔料物質の 微量化学分析	155
第VII章 まとめ	158
第1節 弥生集落	158
第2節 三田古墳	159
第3節 フタツ池周辺	163

挿 図 目 次

- Fig. 1 調査地位位置図
Fig. 2 年度別調査地位位置図
Fig. 3 調査地縦断面
Fig. 4 丘陵部試掘トレンチ配置図
Fig. 5 空照風景
Fig. 6 「近畿トライアングル」概念図
Fig. 7 泉州南部の地形分類図
Fig. 8 山直谷間辺遺跡分布図
Fig. 9 基本層序模式図
Fig. 10 I区包含層出土遺物
Fig. 11 II～IV区包含層出土遺物
Fig. 12 各地区における出土遺物構成比率
Fig. 13 4I-O D
Fig. 14 周辺遺跡にみる小形竪穴住居跡の種類
Fig. 15 57・58・59-O Z
Fig. 16 1-O S、現水路断面
Fig. 17 80・84・101・144-O S
Fig. 18 80・84-O S出土遺物
Fig. 19 91-O O及び出土遺物
Fig. 20 中世耕作関連遺構群（1）
Fig. 21 中世耕作関連遺構群（2）
Fig. 22 78-O X
Fig. 23 ぶつた池田堤防
Fig. 24 IV区遺構配置図
Fig. 25 試掘トレンチ（A丘陵）と遺物分布（1）
Fig. 26 試掘トレンチ（B丘陵）と遺物分布（2）
Fig. 27 住居跡調査風景
Fig. 28 包含層出土遺物
Fig. 29 1-O D
Fig. 30 2-O D（1）
Fig. 31 2-O D（2）
Fig. 32 3-O D
Fig. 33 4-O D
Fig. 34 5-O D
Fig. 35 各住居跡出土遺物
Fig. 36 銅鐸形銅製品
Fig. 37 105-O S出土遺物
Fig. 38 9号トレンチ及び塚断面
Fig. 39 調査前の三田古墳
Fig. 40 三田古墳主要遺構配置図
Fig. 41 墳丘断面図
Fig. 42 埴輪列詳細図
Fig. 43 墳丘上及び周辺出土遺物（1）
Fig. 44 墳丘上及び周辺出土遺物（2）
Fig. 45 墳丘上及び周辺出土遺物（3）
Fig. 46 墳丘上及び周辺出土遺物（4）
Fig. 47 墳丘上及び周辺出土遺物（5）
Fig. 48 墳丘上及び周辺の出土遺物（6）
Fig. 49 木棺内赤色顔料範囲
Fig. 50 遺物出土状況
Fig. 51 棺内遺物出土状況
Fig. 52 墓埴内出土土器（1）
Fig. 53 墓埴内出土土器（2）
Fig. 54 木棺直葬出土鉄器（1）
Fig. 55 三葉環頭
Fig. 56 木棺直葬出土鉄器（2）
Fig. 57 木棺直葬出土鉄器（3）
Fig. 58 木棺直葬出土鉄器（4）
Fig. 59 土玉の放量グラフ
Fig. 60 墓埴内出土玉類（1）
Fig. 61 墓埴内出土玉類（2）
Fig. 62 墓埴内出土玉類（3）
Fig. 63 墓埴内出土玉類（4）
Fig. 64 墓埴内出土玉類（5）
Fig. 65 横穴式石室
Fig. 66 遺物出土状況
Fig. 67 横穴式石室出土土器
Fig. 68 横穴式石室出土鉄器（1）
Fig. 69 横穴式石室出土鉄器（2）
Fig. 70 横穴式石室出土玉類（1）

Fig. 71 横穴式石室出土玉類 (2)

Fig. 72 ガラス小玉の重量グラフ

Fig. 73 横穴式石室出土土器

Fig. 74 横穴式石室出土石製品

Fig. 75 横穴式石室調査風景

Fig. 76 石室再利用に伴う遺物出土位置

Fig. 77 横穴式石室跡出土土器

Fig. 78 試料採取地点

Fig. 79 花粉分析処理フローチャート

Fig. 80 各地点花粉ダイアグラム (1)

Fig. 81 各地点花粉ダイアグラム (2)

Fig. 82 各地点花粉ダイアグラム (3)

Fig. 83 各地点花粉ダイアグラム (4)

Fig. 84 各地点花粉ダイアグラム (5)

Fig. 85 各地点花粉ダイアグラム (6)

Fig. 86 各地点花粉ダイアグラム (7)

Fig. 87 No. 8・No. 9 地点断面図

Fig. 88 花粉化石顕微鏡写真

Fig. 89 イネのプラント・オパールの検出状況

Fig. 90 おもな植物の推定生産量と変遷

Fig. 91 広岡 (1977) による西南日本の考古遺跡焼土

の測定から求められた過去2,000年間の地磁気

永年変化曲線 (偏角一伏角図)

Fig. 92 各遺構ごとの各試料の残留磁化方向の等面積
投影図

Fig. 93 中島・谷崎(1990)による3つのタイプの消磁
ベクトル図の典型例

Fig. 94 各遺構のパイロット・サンプルの消磁ベクト
ル図

Fig. 95 全試料の残留磁化方向の等面積投影図

Fig. 96 各遺構の平均磁化方向 (黒丸) と広岡曲線

Fig. 97 発掘直後の小銅鐸

Fig. 98 X線ラジオグラフィー

Fig. 99 接合検討

Fig. 100 補強・強化状況

Fig. 101 完了状況

表 目 次

Tab. 1 フタツ池周辺出土土器観察表

Tab. 2 弥生集落出土土器観察表

Tab. 3 土玉計測表

Tab. 4 ガラス小玉計測表

Tab. 5 三田古墳出土土器観察表

Tab. 6 花粉帯対比表

Tab. 7 植生変遷

Tab. 8 プラント・オパール分析結果

Tab. 9 測定結果 (1)

Tab. 10 測定結果 (2)

Tab. 11 考古地磁気測定結果 (平均磁化方向)

Tab. 12 考古地磁気年代推定結果

Tab. 13 ¹⁴C再計算年代

Tab. 14 上フジ遺跡出土の小銅鐸の蛍光X線非破壊分
析結果

Tab. 15 小銅鐸復元工程

Tab. 16 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットの
Rf値と色調

Tab. 17 ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

付 図

1 フタツ池周辺 (I・II・IV区) 全体図

3 弥生集落全体図

2 フタツ池周辺 (III区) 全体図

卷頭カラー図版

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 弥生集落遺景・弥生集落全景 | 5 三田古墳第2主体 |
| 2 銅鐔形銅製品出土状況・回復元 | 6 第1主体出土三葉環頭大刀・岡出土剣 |
| 3 三田古墳全景 | 7 第1主体出土鉄鏃・第2主体出土鉄鏃 |
| 4 三田古墳第1主体 | 8 第1主体出土土器・第2主体出土玉類 |

写真図版目次

- | | |
|-------------------|--------------------|
| PL.1 調査地遠景 | PL.25 三田古墳第1主体(2) |
| PL.2 1区全景 | PL.26 三田古墳第1主体(3) |
| PL.3 Ⅲ区全景(1) | PL.27 三田古墳第1主体(4) |
| PL.4 Ⅲ区全景(2) | PL.28 三田古墳第1主体(5) |
| PL.5 N区 | PL.29 三田古墳第2主体(1) |
| PL.6 Ⅲ区遺構 | PL.30 三田古墳第2主体(2) |
| PL.7 試掘調査地(1) | PL.31 三田古墳の盛土 |
| PL.8 試掘調査地(2) | PL.32 I~N区出土遺物 |
| PL.9 試掘調査地(3) | PL.33 弥生集落出土遺物 |
| PL.10 試掘調査 | PL.34 Ⅲ区・弥生集落出土遺物 |
| PL.11 弥生集落全景(1) | PL.35 三田古墳出土遺物(1) |
| PL.12 弥生集落全景(2) | PL.36 三田古墳出土遺物(2) |
| PL.13 遺構検出状況 | PL.37 三田古墳出土遺物(3) |
| PL.14 1-OD | PL.38 三田古墳出土遺物(4) |
| PL.15 2-OD(1) | PL.39 三田古墳出土遺物(5) |
| PL.16 2-OD(2) | PL.40 三田古墳出土遺物(6) |
| PL.17 3-OD | PL.41 三田古墳出土遺物(7) |
| PL.18 4-OD | PL.42 三田古墳出土遺物(8) |
| PL.19 各住居跡細部 | PL.43 三田古墳出土遺物(9) |
| PL.20 塚 | PL.44 三田古墳出土遺物(10) |
| PL.21 三田古墳(調査前) | PL.45 三田古墳出土遺物(11) |
| PL.22 三田古墳全景 | PL.46 三田古墳出土遺物(12) |
| PL.23 三田古墳順輪列全景 | PL.47 三田古墳出土遺物(13) |
| PL.24 三田古墳第1主体(1) | PL.48 三田古墳出土遺物(14) |

第1章 調査経過とその方法

第1節 調査に至る経過

都市計画道路泉州山手線は、現在供用されている通称泉北1号線（府道堺狭山線、同和泉富田林線）の終点である光明池付近から、泉南地域の泉佐野市上之郷を結ぶ道路として計画されたものである。和泉市部分は1966年に、岸和田市域は1967年にそれぞれ計画決定されたが、今回の調査対象となる岸和田市側については、当初計画の道路幅員30mから1987年最終的に65mへ変更された。

近年泉州地域は、関西国際空港の1994年開港にむけて関連事業が急ピッチで行なわれており、岸和田市内でも都市計画道路磯之上山直線や近畿自動車道松原・すみ線などが部分的ながらも開通している。

そのような状況下、泉州山手線建設もいよいよ本格化し、関西国際空港開港時にむけ、全線のうち光明池～磯之上山直線間の約4kmの開通が急務となった。このうち岸和田市内



Fig. 1 調査地位置図

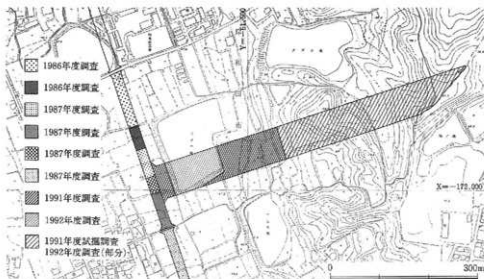


Fig. 2 年度別調査地位位置図

の予定地は、1983年度大阪府教育委員会が実施した都市計西道路磯之上山直線（主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線）予定地内分布調査で、新たに発見された上フジ遺跡及びその隣接地に該当する。

当遺跡は磯之上山直線建設に先立ち、1986年大阪府教育委員会の指示により岸和田土木事務所と当協会で委託契約を交わし、予定地内の試掘調査を実施した。その結果全線にわたり遺構・遺物を確認したため、直ちに全面調査に入った。調査は同年から1987年にかけて第1次・2次を行い、古墳時代後期の堅穴住居跡や奈良時代の建物跡、中世の耕作遺構などを検出した。さらに1987年から1988年にかけて実施した第3次調査では、古墳時代後期の土坑跡や中世の耕作遺構を確認している。なお上記調査成果は、当協会より『上フジ遺跡発掘調査報告書』（1988）、『二俣池北遺跡・上フジ遺跡』（1989）の2冊を刊行し、その成果を公表している。

今回の調査地は、この磯之上山直線に接続する部分、ならびに東山丘陵（岸和田市側）の約22000㎡である。まず1991年から1992年にかけて行った第4次調査では、予定地内の平地部分約12000㎡の全面調査（フタツ池を除く）と、丘陵部分の試掘調査を実施した。さらに1993年度には、フタツ池及び大阪府教育委員会が前年度実施した試掘調査で全面調査を必要と判断した部分を調査した。

第2節 調査経過

本節では、2ヶ年度にわたって実施した上フジ遺跡の調査経過を簡単に紹介しよう。

1991年度の調査は、まず磯之上山直線際から調査（以下Ⅰ区とする）を始めた。調査の過程で生じる排土は、この部分で処理せざるを得なかったので、調査区を任意に2分割した。幸いにも当所の調査では、ある程度磯之上山直線内の発掘調査資料を参考にすることができた。本来当地一帯に存在したであろう古代以前の遺構群は、中世における耕地開発のためことごとく削平されていた。その結果出土遺物は細片ばかりであった。また現存する条里地割に沿った溝が調査区内にあったので、いったん水路を切り替える処置をこうじて、調査を行った。

続いてフタツ池南側にある調査対象地（以下Ⅱ区とする）に着手した。堤防と調査区境界に挟まれた些少な範囲ではあったが、厚さ1m数十cmにおよぶ盛土と湧水のため、予想外に難航した。

同年9月以降は、フタツ池東側一帯（以下Ⅲ区とする）と東山丘陵の試掘調査に入った。池東側は調査に入るまで、なだらかな斜面地を利用した段々畑として利用されていた。段々畑は5～6段で構成されており、その比高差は約7mであった。調査では一帯を大きく4分割し、北東→北西→南東→南西の順序で進めた。

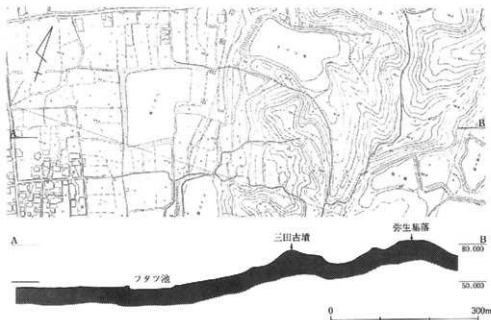


Fig. 3 調査地縦断面図

ところで段々畑とは、今までの調査経験から斜面地を階段状に削りだし、排土をその先端部に盛るものと思っていたが、当地の段々畑は全て砂・粘土の互層からなる盛土であった。そのため最初の調査区では、最大4mに及ぶ盛土を約2ヵ月かけて調査することとなった。

年内には調査区北半の発掘を終了させたが、検出遺構はフタツ池際に集中する傾向がうかがえた。その後実施した南半部の調査でも、北側と同様の結果を得ている。

一方東山丘陵の試掘調査は、まず一帯に生い茂る竹の伐採・搬出作業から始まった。同丘陵には、調査予定地内に幅100m余りの谷があり（以下東側をB丘陵、西側をA丘陵と仮称する）、搬出作業は多大な時間と労力を必要とした。

調査は9月にA丘陵西側斜面の伐採を行い、空中からの地形測量後、3ヵ所のトレンチを設定、掘り下げた。その後A丘陵東側斜面からB丘陵にかけて伐開し、同様に空中撮影を行い、丘陵平地や斜面、古墳状高まりを調査した。

試掘調査の最後は、『大阪府文化財分布図』に三田古墳と呼称される古墳の調査である。寒風吹き荒れる中作業を進め、6世紀代に築造された径もしくは一辺18mの古墳であることを確認、1992年2月試掘調査を完了した。

1992年度の調査は、試掘調査の結果をうけて秋頃から、フタツ池内全域と東山丘陵B丘陵で始まった。前者（以下IV区とする）は池内の水を完全に抜き取り、乾燥させた後に調査を開始したが、水口周辺以外ではかなりの範囲で包含層を確認することができた。

B丘陵では、斜面地において一切遺構を確認することはできなかったが、丘陵尾根にある平地で弥生時代の焼失家屋4棟を含む5棟の竪穴住居跡を検出した。2月5日には奈良国立文化財研究所飛鳥資料館工業普通氏の現場視察があり、集落跡全般ならびに住居跡出土の銅鐸形銅製品破片の復元についてご教示などを得た。

さらに1993年当初から調査を始めた三田古墳では、予想に反して形態の異なる2つの埋葬主体を発見した。特に墳頂部の埋葬主体（木棺直葬）は乱掘を受けていないことが判明し、調査関係者に大きな期待を持たせた。また墳丘西側に構築された横穴式石室では、石取りが甚だしかったものの、副葬品は比較的まとまって遺存していた。

このように2ヵ年にまたがって調査を行った上フジ遺跡は、弥生時代から中・近世に至る豊富な遺構・遺物を検出し、当地一帯の歴史的発展を解明する上での貴重な資料を得ることができた。また調査期間中は幸いにも天候に恵まれ、計11回実施した航空測量では雨天による延期はただの1度もなかった。

第3節 調査・整理の方法

1. 調査の方法

本協会職員は、固有職員と近隣の各地方自治体からの派遣職員で構成されている。そのため職員の出入りは激しく、調査・整理方法の標準化が必要不可欠であった。そこで作成されたのが『発掘調査規程』であり、調査はこの規程に従って実施される。

それによると、大阪府発行の1/2500地形図を基準とし、500m四方、100m四方、4m四方に分割して位置表示し、それぞれの地区名を順に付して地区名表示する。この大小地区はいずれも第VI座標系を基準として設定しているため、検出した遺構の所在を座標値で表記することもできる。そのため調査開始前、調査予定地内に3級基準杭を数ヶ所設置し、さらに調査区ごとに4級基準杭を設置した。

調査に際しては、2ヶ年とも現耕作土・床土及び丘陵部の腐植土層のみを重機によって掘削したが、その他は全て人力による発掘を行った。また各調査区とも分層を行い、必要に応じて各層ごとに遺物の取り上げを実施した。

1991年度実施した東山丘陵内の試掘調査は、三田古墳を含め古墳状隆起9ヶ所、斜面や平坦地に11ヶ所、合計20ヶ所にトレンチを設定し調査に臨んだ。

出土遺物は、先の方法で調査区を区画した最小単位である4mメッシュでの取り上げを原則とする。今回の調査も基本的にこの方法を踏襲した。

検出遺構の図化は、ヘリコプターによる航空測量を基本とする。また試掘調査直前の丘陵一帯の地形を把握するために撮影を行い、より精密な地形測量図を作成した。1991年度は計7回、1992年度は計4回の撮影を実施したが、古墳主体部など航空写真による図化では表現不可能な部位は、随時調査担当者らによる実測を行った。

フタツ池周辺では、調査区内及び遺構内に堆積した土砂に対して花粉分析を行い、環境復元に必要な資料を得た。その他中世耕作地ではプラント・オパール分析を、焼失住居では熱残留磁気測定・放射性炭素年代測定をそれぞれ行った。

また銅鐸形銅製品の成分分析・保存処理については、奈良国立文化財研究所村上 隆氏より、木棺出土の赤色顔料は武庫川女子大学安田博幸・金杉直子氏より玉稿を賜った。

2. 整理の方法

今回の調査で出土した遺物は51コンテナに及ぶ。しかし遺構出土の良好な一括遺物は極めて少なく、フタツ池周辺の平坦地で出土した遺物は細片が大半を占める。このような理

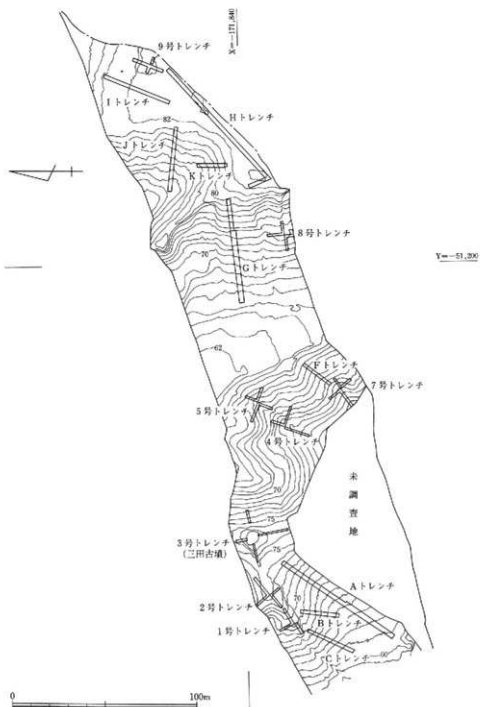


Fig. 4 丘陵部試掘トレンチ配置図

由で、復元実測はおろか器種さえ判別できないものが多かった。そこでこれら細片遺物は、遺物種類ごとに分類・集計し、必要に応じて器種・時期の細別を行った。検出した遺構との関係を考慮するための基礎資料である。なお集計作業は原則として破片数のみを行ったが、三田古墳出土鉄器に関しては一部個体数の把握に努めた。

今回出土した遺物の大半は土器類であるが、三田古墳を調査した関係上かなりの鉄器が出土した。鉄器は完全に錆化していたので、調査完了後すみやかに錆落し作業を実施し、接合・実測・写真撮影を行った。

このほか三田古墳頂部検出墓墳及び木棺部分、ならびに横穴式石室内の埋土については、発掘現場にて3mm目のフルイにとおし、アミ目に残った土を調査事務所で水洗・選別作業を行い、ガラス玉などの微細遺物の発見に努めた。その結果、水晶製切子玉2個、ガラス玉4個、ガラス小玉62個、土玉17個をはじめ、鉄鱗片や鉄片、石鱗などをみつけることができた。

最後に遺構番号の表記について記しておく。1991年度の調査で検出したⅠ～Ⅲ区の遺構については、1から通し番号を付した。また翌年度の調査分のうち、前年度調査地に隣接するⅣ区では201から、弥生集落では1からの通し番号をそれぞれ付けたが、三田古墳については、古墳を形成する個々の遺構に対して一切遺構番号・記号を与えなかった。本報告書では、調査現場で以上のように付与した遺構表記をそのまま掲載する。



Fig. 5 空測風景

第II章 遺跡の環境

上フジ遺跡は、大阪府西南部、通称泉州と称される地域のはば中央に所在する岸和田市三田町にある。

泉州地域の地形的特徴は、美濃・丹波・紀伊に囲まれた「近畿トライアングル」に位置するところにあるという。これは美濃・丹波による東西圧縮で、大和高原・奈良盆地・生駒山地・河内盆地・上町台地・大阪湾という地形のうねりが、さらに紀伊を加えた南北圧縮によって、和泉山脈・六甲山系が形成されたというものである^[1]。泉州地域南部一帯の谷筋は、あたかも金剛葛城山系から発する河川によって開析されたとみてとれるが、実はこの東西圧縮による影響が大きい。

この地形が形作られた遙かのち、人類はこの泉州一帯に生活の場を求めた結果、須恵器生産の一大拠点となる「陶邑」や百舌鳥古墳群をはじめとする数多くの足跡を残し、現在に至っている。泉州の歴史的発展は「東西圧縮の賜物」ともいえよう。

さて上フジ遺跡は、泉州南部にある谷筋の中の一つである通称「山直谷」に位置する。当遺跡周辺の歴史的発展過程を紹介する前に、この谷がどのような地形的特徴を有するのか、いままじ触れておこう。

山直谷は南北約6.5km、東西約1kmの範囲内に、主として低位段丘で構成される平坦地をもつ。谷中央やや西寄りを牛滝川が蛇行しながら北流する。ゆえに平坦地は、右岸側が左岸に比べて広い。また谷西側の岡山丘陵、東側の東山丘陵とも支谷が発達しており、現在でも谷池が随所にみられる。

ここで、近年空港連絡道路予定地内の発掘調査が行なわれた「日根野谷」の様子を紹介しよう。日根野谷は東西約4km、南北約5kmの広さをもつが、樫井川は谷西側の丘陵裾を沿って北流するため、その右岸は広大な平坦地を有する。現存条里がこの樫井川流域のみに展開することからわかるように、右岸の大部分は溜池を築造しない限り可耕地たりえなかつたと推察される。事実発掘調査では古代以前の遺構はほとんどなく、中世以降で

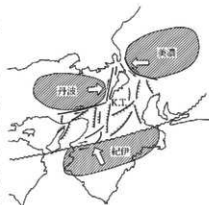


Fig. 6 「近畿トライアングル」概念図

ないと本格的な開発はなされなかったのである⁽³⁾。

また山直谷の東側に隣接する「松尾谷」は、谷の長さ約6km、幅約0.5kmの範囲内に松尾川が蛇行しながら北流する。そのため可耕地たる平坦部は些少で、本格的な遺跡調査は実施されていないものの、開発はいま一つであったようだ⁽³⁾。

このように地形に恵まれた山直谷は、人類の手でどのように開発されていったのであろうか。今から10年ほど前、岸和田市域には約140ヶ所の遺跡が周知されていたにすぎず、上フジ遺跡周辺ではわずかに三田古墳と三田遺跡の一部が知られているだけだった。その後大小様々な開発に伴い、市域全体の遺跡数が増加の一途をたどり、現在その数は180ヶ所にもおよんでいる。

「山直谷」では、都市計画道路磯之上山直線建設が具体化し、1983年に実施された大阪府教育委員会による同線予定地内分布調査で、上フジ遺跡を含む10余の遺跡が新規発見された。これら遺跡の2/3以上はすでに調査が終了し、今まで不明瞭だった「山直谷」の歴史の変遷の一端が判明しつつある。

当地一帯に人間が活動し始めたことを示す最古の資料は、1986年に調査した上フジ遺跡から出土したナイフ形石器や、黒石遺跡出土の有舌尖頭器がある。また石鎌は各遺跡にて

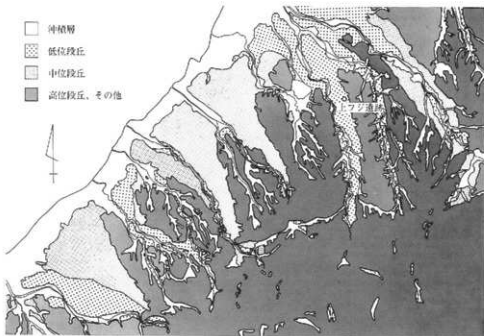


Fig. 7 泉州南部の地形分類図



Fig. 8 山直谷周辺遺跡分布図

頻繁に出土するが、谷周辺に定住したことを示す明確な痕跡は、縄文時代後・晩期頃を初現とする。東山丘陵先端部の低位段丘上に立地する小田遺跡や軽部池西遺跡では、住居跡などの遺構は未発見ながら、自然河川から多量の土器が出土しており、付近に居住空間が広がっていたことは明らかである。またその数百m東に位置する山ノ内遺跡では、石器とともに膨大な砂片・剥片が出土した。この性格については、最近河内長野市所在高向遺跡とともに、集落内の石器製作跡との見解が示されている⁽⁶⁾。

このようなことから、谷内部は狩猟・採集の場として利用されていたが、定住地としての利用度は皆無に等しく、谷入口の軽部池周辺から山ノ内遺跡一帯を居住空間として活用していたものと推定される。

弥生時代は狩猟・採集経済から生産経済へと変換したが、基本的居住場所は変わらなかった。谷内では山直中遺跡出土中期壺片と、岡山丘陵上に立地するどぞく遺跡や岡山遺跡で後期の土器が採集されている程度である。谷入口に位置する摩湯山古墳が築造された古墳時代になっても、前代とは大差なかった。同古墳に接する三田遺跡で土墳墓165基を検出したことや、芝ノ垣外遺跡から布留期の住居跡が数棟発見されたくらいである。山直谷内の開発は、「点」的なものにすぎなかったようである。

集落活動が本格化するのは同時代後期以降である。まず5世紀末から6世紀初頭頃、堅穴住居5～6棟で単位をなす集落が、三田遺跡南端に位置する開析谷（現藤池）北側の微高地部分で出現し、6世紀後半まで周辺一帯を居住域とした。6世紀後半には、当遺跡のみならず隣接する上フジ遺跡や二俣池北遺跡にまで集落範囲を拡大する。

このような中、6世紀末～7世紀初頭に集落内に大きな変化が起こる。建物構造が堅穴住居から掘立柱建物へ変化する。また各家族体の集団内からの自立傾向を物語るかのようになり、三田遺跡では各々2～4棟で構成された住居跡が、溝などによって4つほどのグループに画されていたことも判明している。

一方当地で集落活動が開始されてまもなく、三田遺跡では6世紀代に属する3基の古墳が築造されたようである。墳丘が削平されているため詳細は不明だが、当地に本格的な開発のメスを入れた集団の首長の墓であることには違いない。しかし相近接する時期に築造されたと考えられる三田古墳と比較すると、立地・墳丘規模の点で大きく異なる。

その後開発のメスは、その中心を徐々に南に移動させながら進む。7世紀代になると、二俣池北遺跡や水込遺跡一帯が中心地として栄える。続く奈良時代の住居跡は、現在のところ三田遺跡や水込遺跡、芝ノ垣外遺跡で確認したにすぎないが、谷一帯の調査地で同期

の土器が出土しており、かなり広範囲での集落活動を想定することができる。その背景の一つとして水源池や用排水路の整備があろう。水込・山直中・芝ノ垣外遺跡で検出した溝跡は、その規模の点で5～6世紀代の溝とは異なる。この結果、段丘平坦面はほぼ全域が可耕地として利用されるに至ったと考えてよからう。

平安時代前期の集落は、山直北遺跡や山直中・芝ノ垣外遺跡で、また続く平安時代後期～鎌倉時代初頭にかけての集落は、水込遺跡や黒石・山直中遺跡などでみつかっている。このうち山直北遺跡で検出した掘立柱建物跡は、その柱穴の大きさや緑釉陶器が出土したことから、特異な存在として注目される。

一方条里制施行に伴って規格化した耕地が得られるようになり、生産力はそれ以前に比べ大幅に上昇したと思われる。ところが室町時代以降の集落跡は、度重なる発掘調査にもかかわらず検出していない。鎌倉時代までの散村形態から集村形態へと変化した結果が、このような現象を引き起こしたと思われるが、集落の移動に伴い生産地の再整理も行われているはずである。この集村化現象は、基本的に近世以降の山直谷の集落形態を規定したと考えられるが、近世の開発行為は現在のところ不明瞭な部分が多い。

注1 藤田和夫『変動する日本列島』（岩波新書306）1985 岩波書店 76～90p.

Fig.6は本書90p. の図VI-6を一部改変している

- 2 尾上 実「日根荘の発掘調査」『シンポジウム 日根荘総合調査が語るもの』1991（財）大阪府埋蔵文化財協会 32～43p.
- 3 和泉丘陵内遺跡調査会 乾 哲也・白石耕治氏ご教示
- 4 藤田憲司「包含層出土遺物の評価」『考古学における計量分析』1991 帝塚山考古学研究所 47～56p.

参考文献

- 『岸和田市史』第1巻 1978 岸和田市
『芝ノ垣外遺跡発掘調査報告書』1986 大阪府教育委員会 他
『三田遺跡発掘調査報告書』1987（財）大阪府埋蔵文化財協会
『山直北遺跡・山ノ内遺跡B地区』1988（財）大阪府埋蔵文化財協会
『上フジ遺跡発掘調査報告書』1988（財）大阪府埋蔵文化財協会
『山直中遺跡発掘調査報告書』1988 大阪府教育委員会 他
『上フジ遺跡・二俣池北遺跡』1989（財）大阪府埋蔵文化財協会
『黒石遺跡』1990（財）大阪府埋蔵文化財協会
『山直中遺跡II』1990（財）大阪府埋蔵文化財協会

第三章 フタツ池周辺の調査

第1節 基本層序

I区では、現耕作土層以下床土層、旧耕作土層(3a層)、旧耕作土層(3b層)、地山層の順序で堆積が認められた。このうち3a層は近世陶磁器類を包含し、3b層では瓦質土器などを含む中世包含層である。また各層とも花粉分析を実施したが、3a層には泉州地域で近世以降急増するアブラナ科花粉が多量に含まれていたとの報告を受けた。

IV区は、池西端の水口付近にヘドロのみが堆積し、本来存在したであろう遺物包含層は全く確認できなかった。しかし池中央部付近から、厚さ10cm程度の瓦質土器を含む層を発見することができた。この包含層はIII区まで連続するらしい。その上層には、砂や粘土で構成された層やごく薄くヘドロ層が堆積する。前者の砂・粘土層は、次に述べるIII区の盛土が何らかの理由で流出し、沈澱・堆積したものと推測される。

II区やIII区の基本層序は、現耕作土層以下部分的に流土層が堆積するが、下部には1～4mにも及ぶ盛土層がある。さらにIII区中央付近から西側に向けて青灰色砂混シルト層が堆積し、地山層に至る。この大規模な盛土は、砂と粘土を互層状に盛ったもので、部分的に鉄分の沈着著しい箇所、グライ化した箇所などが認められた。遺物は、基本的に流土層及び青灰色砂混シルト層に含まれ、前者から近世陶磁器片や須恵器・埴輪片が、後者から須恵器や瓦質土器などが出土した。

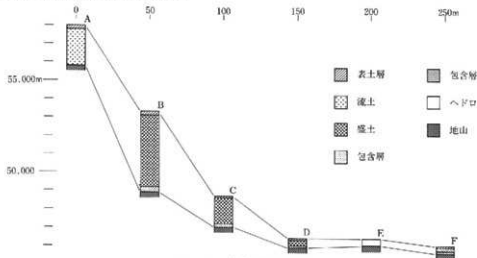


Fig. 9 基本層序模式図

第2節 包含層出土遺物

1. I区

フタツ池周辺の調査区ではそれぞれ遺物包含層が認められた。各々の種類ごとの構成比や出土傾向は後述することとして、まず図示した遺物の説明を加えよう。

(1)～(4)は古墳時代から奈良時代にかけての須恵器である。I区出土の高杯の脚部破片(1)は、4方向に方形の透かしを穿ったもので、その周囲にはカキ目調整を施す。杯片は数片出土したが、図化に適したものはほとんどなく、(2)を示した。体部下半は欠損しているが、受け部は斜め上方に立ち上がり、端部は丸くおさめている。(3)は有蓋高杯の杯部破片である。受け部及び体部下半が破損しているが、恐らく長脚2段の脚部を有するものであろう。

奈良時代の須恵器は、高台部分の破片が比較的顕著であったが、ここでは長頸壺(4)の底部付近の破片を図示する。

舶載陶磁器も若干片出土したが、いずれも細片ばかりで、提示できる資料は次の白磁2片(5・6)である。いずれも太宰府分類の4類に属し、12世紀頃福建省周辺で生産されたものと思われる⁽¹⁾。

瓦器はI区で最も多く出土したが、元来もろい性質によってその大半が細片化しており、実測可能な遺物は数片にとどまった。また本来施されていたであろう内外面の調整もまた、器壁の摩耗によってほとんど見分けることができなかつた。瓦器は碗と皿に分類できる。碗(7)～(11)には、内面見込み部分に平行暗文やラセン状暗文を施すもの(10・11)や、もはや高台が消滅してしまったもの(9)などが含まれており、かなりの時期幅を有する。一方瓦器皿にも(12)のように、内面に暗文が施文されたものも認められる。

土師質土器には、小皿(14)や甕(15)、羽釜(16・17)がある。小皿はその形状にかなりのばらつきがあるが、ここでは(14)の1点のみを図示した。(15)は一般的に紀伊型甕と称されるもので、口縁部が外方向に大きく「く」字状に外反し、端部を内上方につまみあげる。体部は大きく張り出すようで、頸部外面には指頭圧痕が認められる。胎土には結晶片岩を含んでいる。14～15世紀代に位置づけられるが、山直谷をはじめとして周辺各地で出土する。

出土した瓦質土器は羽釜と鉢(18)である。他の種類に比べて瓦質土器の出土率は低い。このほかにも、石織や黒色土器A類、フイゴ片なども出土している。

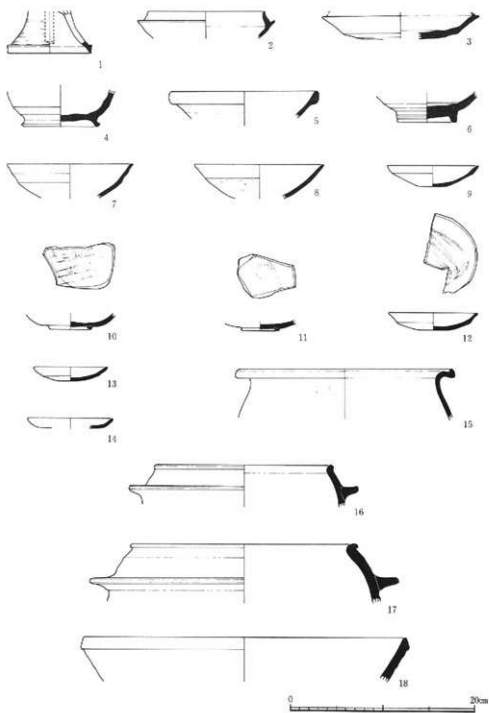


Fig. 10 I区包含層出土遺物

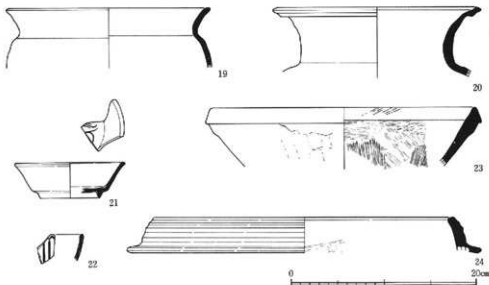


Fig. 11 II～Ⅳ区包含層出土遺物

2. II～Ⅳ区

Ⅱ区から出土した遺物は非常に少ない。これは調査区面積が些少であることに加え、1 mにも及ぶ盛土中にはほとんど遺物が含まれなかったことによる。さて出土遺物には瓦器片・瓦片があるが、ここでは青磁片(22)を図示した。

一方、Ⅲ区もⅡ区同様Ⅰ区に比べ出土遺物量が極端に減少する。そのような中で土師器甕(19)や須恵器甕(20)といった6～7世紀代の遺物や、瓦質土器の鉢(23)や羽釜(24)も含まれる。

その他フタツ池内のⅣ区においても、須恵器・瓦器・土師器・瓦質土器などの遺物が出土した。遺物は主として排水口反対側の池東半で出土したが、Ⅰ区のように細片化が進んでおり、図示できる遺物は極めて少ない。かつて当地に耕作などが行われていたことを暗示させる。そのような中14～15世紀頃と考えられる、泉州一帯では珍しい双魚文の青磁杯(21)が1点出土した。

3. 包含層出土遺物の組成

今回の調査対象地においてはそれぞれ遺物包含層を確認することができたが、種類別構成比をみると瓦器や土師質土器といった中世期の遺物が顕著である。また地区別での出土量比では、その調査面積にもかかわらず東山丘陵側に向かって減少傾向にあることがわか

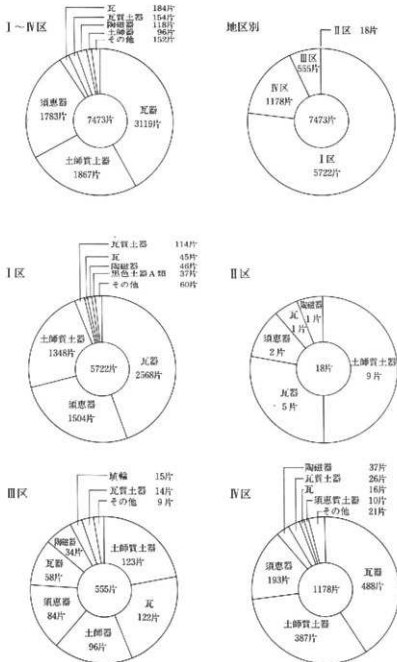


Fig. 12 各地区における出土遺物構成比率

る。このことは生活空間が、主として現フタツ池以西に限られていたこと、その時期は須恵器も一定量出土しているが、中世期になってかなり活発化したと考えることが可能であろう。

次に地区別出土遺物について、いまいし詳細に検討してみよう。

I区出土遺物を詳細に観察すると、①古墳時代後期以降の須恵器が含まれ、瓦器に次いで多く出土していること、②少量ながら黒色土器A類が出土していること、③最終末と考えられる瓦器碗や瓦質土器が含まれていること、④遺物は全体的に細片化し、摩耗した遺物が多いこと、などの特徴を有する。これらを総合すると、当地一帯は古墳時代後期以降生活空間として利用された可能性が極めて高く、瓦質土器が使用されて後に、生産空間へとその土地利用方法が変化したと考えることができる。またグラフには現れないが、数点のフイゴ片も出土している。

II区の場合、調査面積が非常に狭く湧水も激しかったので、十分な調査ができたとはいえない。またIII区同様、当地一帯も1m近い盛土が施されていた。

遺物は耕作土直下の床土層から青磁片が出土した以外は、すべて最下層の青灰色砂混シルト層から出土した。それらは些少な調査区を反映してか、ごく少量の瓦器や土師器片などであったが、次に述べるIII区と同じく、居住地として利用されていなかったことも関係するかもしれない。

III区は後述するように、東山丘陵上に存する三田古墳から流出した埴輪や須恵器、土師器が、全出土遺物の約4割を占める。その他は土師質土器や瓦器も認められるが、近世陶磁器や瓦片の出上がかなり顕著であった。

しかし他の調査区と比較すると、調査面積のわりに遺物出土量は極めて乏しい。これは検出した遺構に生活空間的なものがなく、生産空間を示すようなもので占められていることと無関係ではないだろう。

IV区は現在池となっているが、一定量の遺物が出土しており、いずれも細片化していることから、中世期までは耕作地などとして利用されていたのは確実である。

以上のような各地区ごとの遺物構成比の相違は、後述するように地形環境に起因する開発過程の違いによると思われる。

第3節 検出遺構と遺物

1991・92年度に調査を実施した箇所では、約170基の遺構を確認した。しかしその大半は、遺物を含まないため時期すら限定できないものであり、特にI区では後世の削平が著しかったため、本来の様相すら把握することは困難であった。よってここで個別記述できる遺構は約20基にすぎない。

1. I区

調査前は水田・畑地として利用されていたところで、田畑の区画ごとに若干の段差は認められたが、極めて平坦な箇所であった。隣接する磯之上山直線関連調査（以下山直線調査とする）では遺物は出土するものの、ある時期の削平によって明確な遺構は全くといってよいほど検出できなかった。今回検出した明確な遺構は、竪穴住居跡、溝跡、水田跡である。

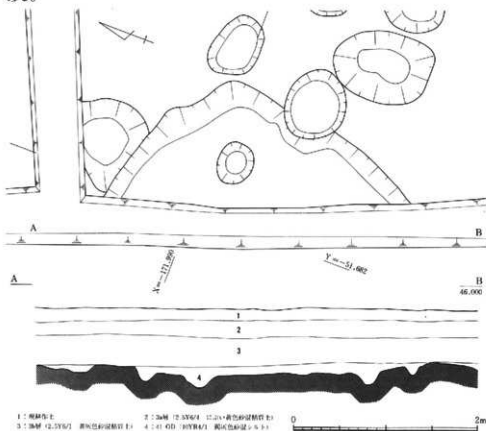


Fig. 13 41-OD

41-O D 調査区西端で検出した竪穴住居跡の一部で、一辺2.6m(約6.8㎡)と非常に小さい。柱穴は断面部分を含めて3ヵ所確認しているが、カマドは未検出である。断面を観察すると浅い壁溝が巡っているが、凹凸のある床面には貼床は認められない。

山直線調査時には、関連遺構は全く検出されていない。出土遺物はなく、時期を確定することは困難であるが、約120m北側の調査区で6世紀後半の住居跡が確認されていることから、本住居跡も似通った時期を想定したい。

先の包含層出土遺物で触れたように、周辺に当該期の集落が広がっていたことは確実であるが、この住居跡は偶然削平を免れたのか、当然免れるべき構造であったのか、もしそうなら若干特殊な住居跡と考えるべきかもしれない。

ところで41-O Dのような小形竪穴住居跡は、周辺の遺跡で散見される。以下に示したものはその類例である。(1)は界市土師遺跡検出のSA006である。一辺2.6~2.8m四方(約7㎡)で6世紀初頭に比定されている⁽¹⁾。(2)は隣接する三田遺跡のB478-O Dである。B844-O Dに重複して検出された。規模は2.3×3.1m(約7㎡)。5世紀末と考えられている⁽²⁾。(3)は上フジ遺跡(山直線調査)の168-O Dである。2.2×2.1mで約5㎡を測る。時期は6世紀後半という⁽⁴⁾。このほか乾 哲也氏によると、和泉市万町北遺跡でも2棟の小形竪穴住居跡が確認されているという。1つは3×3m(9㎡)のカマドを有する竪穴住居跡であるが、住居跡内に柱穴は一切なかった。他は2×2m(4㎡)のカマドを持たない住居跡で、周囲には柱穴を持つ。いずれも6世紀末~7世紀初頭に営まれたものである。

整理段階で目についたものは以上である。今後初現や集落内での在り方などから検討する必要があるだろう。

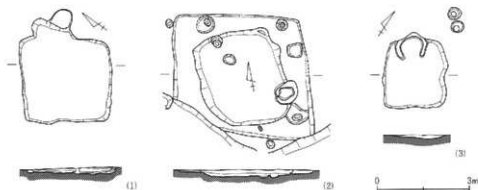


Fig. 14 周辺遺跡にみる小形竪穴住居跡の類例

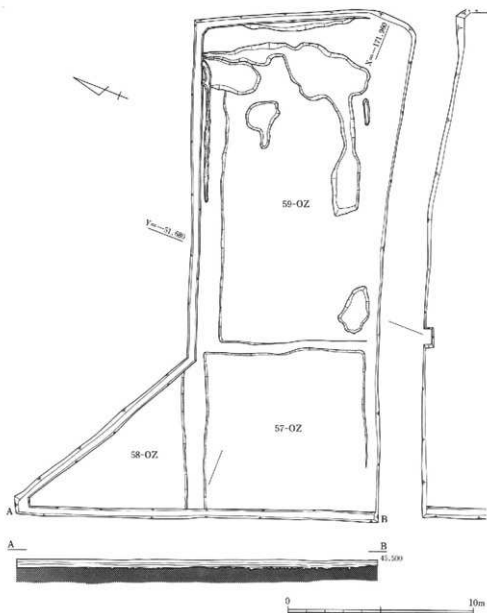


Fig. 15 57・58・59-OZ

中世水田跡

57-OZ I区の北西隅付近で検出した水田跡の1つである。水田面と考えられる部分は、明黄褐色の地山に無数の灰白色土が斑点状に認められたが、畦畔部分にはそれが全くなく、また断面をみても地山がこの灰白色土が踏み込み状に観察できた。後に詳細な分析

結果を提示するが、この「踏み込み」状遺構には3b層に比べてプラント・オパール含有率は高くなかった。

今回検出した規模は東西約9m、南北約9mであるが、山直線調査時の成果を加味すると、東西に長い水田であったと考えられる。

時期は、室町時代を下限とする3b層直下で検出したことから、やはり同時代を下限とするだけはいえるだろう。

58-OZ 57-OZの北側で検出した水田跡で、山直線調査時には844-OZとしていたものである。明確な規模は不明であるが、やはり東西に長い水田であったようだ。

59-OZ 57-OZ東側で検出した水田跡である。規模は1-O-Sや南側を流れる現水路を考慮すると、東西約16m、南北約8mが考えられる。なお当水田跡の北東隅と南西隅では、取水と排水によるものと思われる地山のくぼみが確認できた。

水路跡

1-O-S 調査区東端を流れる現水路に平行した溝跡で、溝東半分は現水路に重複していたため、完掘することはできなかった。断面を観察する限り、溝は3b層から切り込んでいる。また十分な確認はできなかったが、この水路が周辺に残存している条里地割の坪界溝でもあることから、何度となく浚渫されたことは確実である。図化できなかったが、出土遺物には須恵器・瓦器をはじめ近世陶磁器や瓦片が含まれていた。

一方I区北側を東西に横断する現水路がある。これも残存条里に一致することから、調査を行った。残念ながら水路の起源をおさえることはできなかったが、地山面の高さが水路南側でやや高いことが判明した。もしかすると、かつて坪界ごとに段差が存在したのかもしれない。

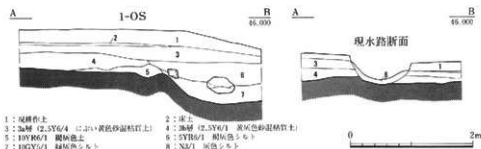


Fig. 16 1-O-S、現水路断面

2. II区

フタツ池南側の堤防に接した調査区である。付近は平坦地であるが、調査の結果約0.6～0.8mに及ぶ盛土が施されており、最下層の青灰色砂混シルト層に瓦器片などが含まれ、地山層に至ることが判明した。検出した遺構はなく、遺物もごく少量であった。

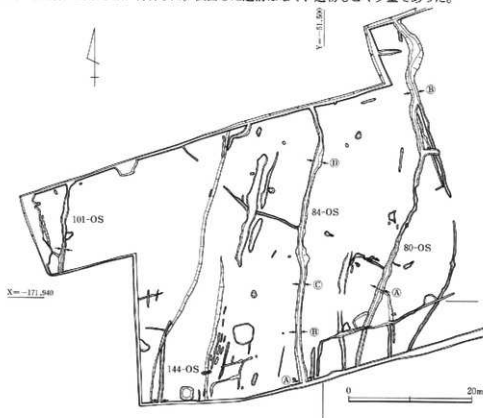


Fig. 17 80・84・101・144-OS

3. Ⅲ区

東山丘陵縁辺部からフタツ池までの調査区で、地形的変化に富んでいる。これは斜面に設定した試掘トレンチの調査で判明した事実であるが、当調査区は本来谷地形を呈している丘陵斜面下に位置しており、斜面地から平地地にかけて流水に伴う地山面の開析が著しい。そのためか、中世以前の遺構は皆無に等しく、生活空間としては不適当な地であったことが想像される。

これに対して、調査区西半分は溝跡などを中心に比較的多くの遺構を検出した。しかしいずれも生産関係の遺構ばかりで、居住を示すような資料には巡り合うことができなかった。よって出土遺物は極めて貧弱である。

中世以前の溝跡

80-O-S 調査区のほぼ南北に流路をもつ溝で、途中で81-O-Sと合流する。最大幅は1.3m、深さ0.4mを測る。須恵器高杯の脚部破片(26)と土師器杯(25)が出土した。

81-O-S 80-O-Sに合流する溝で小規模である。出土遺物はなかったが、80-O-Sと同時期と考えられる。

84-O-S 80-O-S、81-O-Sと同方向に流れる溝で、他の2条に比べ規模は最大である。数少ない出土遺物をみると、7世紀と考えられる平瓶(28)が溝底から、他にも(27)のような壺も出土していることから、少なくとも同期には開削されていたと思われる。また調査区南端付近で溝内最終埋土層から中世の小皿(29)が出土しており、かなり長期間にわたって機能していたことが判明している。

101-O-S 調査区北西隅で検出した溝で、削平を受けたためか深さ15cm程度しかない。



Fig. 18 80・84-O-S 出土遺物

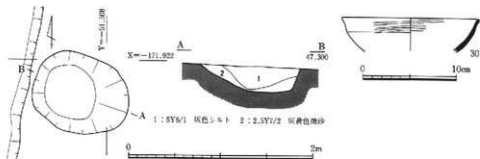


Fig. 19 91-OO及び出土遺物

出土遺物はないが、①他の3条の溝と同方向に流れていること、②花粉分析結果では80-OSと類似した結果が得られたこと、からほぼ同時期を想定している。

なおこの溝は旧フタツ池内に位置していることから、この時点で池内にある程度遺構が残存している蓋然性は高くなった。

中世期の遺構

91-OO 84-OS北端付近で検出した長径1.05m、短径0.85m、深さ0.3mの楕円形を呈した土坑である。外面口縁端部にヘラミガキを施す瓦器碗片(30)が出土した。

106-OS 当調査区で検出した溝で、唯一流路方向の異なる溝である。丘陵斜面末端部では不定形な土坑状を呈するが、途中途切れながらも約70m分を検出した。出土遺物には、須恵器甕胴部破片とともに、土師質羽釜片がある。

108-OS 106-OSにはほぼ直交する溝状の遺構であるが、それに比べて流水痕跡・滯

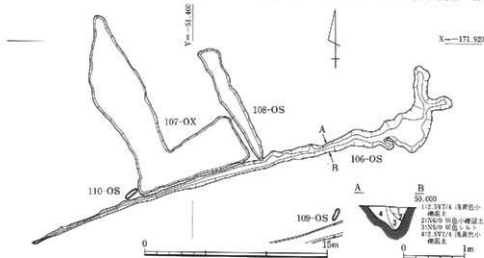


Fig. 20 中世耕作関連遺構群(1)

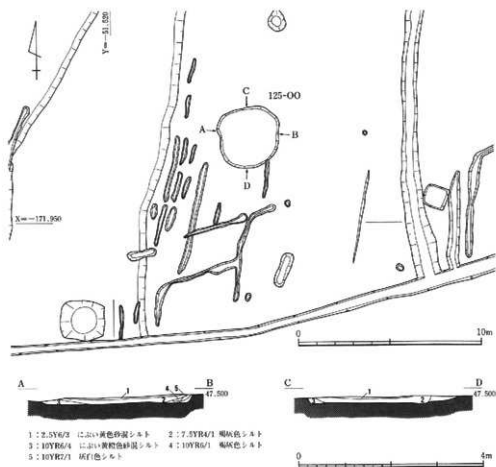


Fig. 21 中世耕作関連遺構群 (2)

水痕跡が認められない。

110-OS 次に紹介する107-OX南西隅から106-OSへ延びる長さ約1m、幅約0.4mの小規模な溝跡である。出土遺物はない。

107-OX 丘陵斜面を下った平坦地で検出した不定形な土坑状の遺構である。明確な遺構ではなかったが、埋土がシミ状に汚れ、締まりがなかったため遺構とした。埋土中には須恵器小片が数片含まれていた。106-OSや108-OS、110-OSとの関係を考えると、水田跡もしくはそれに類する耕作地の跡と考えることもできる。

124-OZ 調査区西半で検出した水田跡である。検出状況としては、I区で検出した57-59-OZと同様であった。

これより西側では、多数の畝溝や125-00のような性格不明の土坑を検出した。これ

らの主軸はいずれも真北をさしており、当地一帯に残存する条里地割の方向とは一致せず、むしろ80・81・84-O Sと同一方向である。

なおこれらの遺構群からは一切遺物は出土していない。しかしながら106-O Sなどの耕作関係遺構が中世期（14～15世紀代）であること、それ以前の遺構・遺物は7世紀代まで遡ること、一連の盛土を除去した後にこれら遺構群を確認したことなどから、中世期の生産遺構と考えられる。また主軸が残存条里と一致していないことは、当地まで条里地割が及ばず、地形に即した耕作地が展開していたと考えることができる。

近世の遺構

72-O S Ⅲ区東端付近で検出した「L」字状の溝跡である。長辺11m・短辺3mを測るが、本来の姿は不明である。この溝自体は地山面ではなく、整地層と考えられる層の上面で検出したもので、形状からみておそらく建物に伴う雨落ち溝のようなものであったと考えられる。

この建物の立地する場所は、東山丘陵内の試掘調査で判明したことだが、小規模な開析谷の真下に位置している。Ⅲ区東壁断面によると、土砂崩れを示すような跡を観察することができた。つまり不安定な場所に建物が建てられたということになる。

溝埋土からは埴輪片が1片出土したが、いうまでもなく遺構本来の時期を示すものではない。しかし付近の攪乱などから、122片の近世瓦片や34片の近世陶磁器類が出土した。この中には、18世紀代の肥前陶磁（伊万里）が含まれている。

これらのことから、本来瓦葺建物が存在したことは確実であるが、それほど規模の大きなものではなかったらしい。

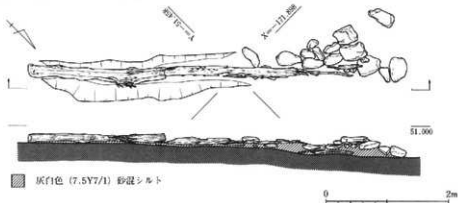


Fig. 22 78-O X

78-OX 地山直上で検出した種状遺構である。長さ2.2m・幅約0.2mと長さ3.2m・幅0.2mの2本の丸太に、幅約10cm、深さ約8cmの溝を彫り込んだものを2本直線上に並び、大形の円礫で固定する。約1.8mもの盛土下に置いてあったので、とても暗渠としての機能果せるとは考えられない。既に述べたように盛土を施すに際して、開析谷から流れ出る豊富な水の排水を良くするために設置した、祭祀的遺構とみなすことも可能かもしれない。

151-O L 調査区西半で検出した地山面の窪みで、調査区北側壁面には、この窪みと対応する堤防跡を観察することができた。しかし南側壁面では攪乱などで十分確認することができなかった。調査前の地割では段々畑の境界部分で、コンクリートの擁壁が構築されていた。また地元には、「徳川（江戸）時代には池であった」との伝承も残っている。

4. IV区

周辺部の調査から、フタツ池内においてもある程度の成果が期待された。果して水口付近での排水に伴う削平もあったが、最近実施された堤防改修工事の影響もなく、池内では遺物が一定量出土した。

なお検出した遺構は、段状遺構（208～212-OX）や耕作関係と考えられる施設ばかりであるが、III区とは異なりその方位はI区同様現存する条里地割に基本的に沿ったものであり、このあたりで地割の境界が存在していたらしい。

また出土遺物については、やはりI区同様細片化したものが圧倒的に多く、図化できる資料には恵まれなかった。

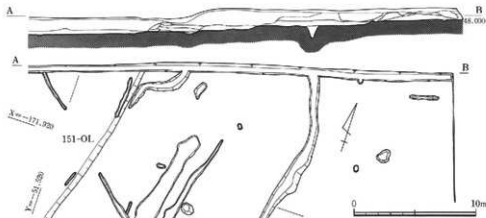


Fig. 23 フタツ池旧堤防

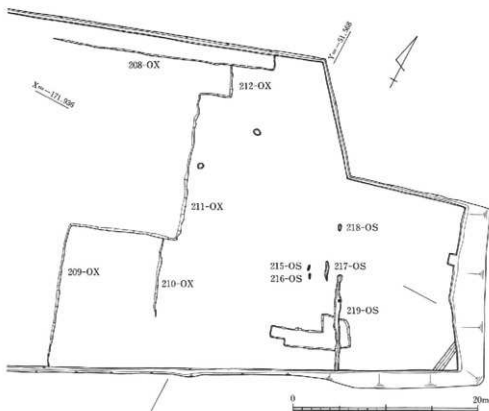


Fig. 24 IV区遺構配置図

Tab. 1 フタツ池周辺出土土器観察表

遺物 番号	調査 番号	採取 番号	遺物の種類 ・器種	出土遺構 ・層位	出量 (㎝, g)	胎土	焼成	色調	備考
1	10	32	須恵器 高杯	3 a層	残存高 4.6	硬密	硬	内 外 断 灰白色(N8/0) "	
2	10		須恵器 杯	3 a層	残存高 2.9 口径 12.9	白色粒を含むが硬密	硬	内 外 断 灰白色(N7/0) "	
3	10		須恵器 有蓋高杯	3 a層	残存高 2.9	1mm程度の白色粒を含む	硬	内 外 断 灰色(N5/0) " にぶい赤褐色(7.5R5/3)	
4	10		須恵器 壺	3 a層	残存高 4.0	硬密	硬	内 外 断 灰白色(N7/0) 灰色(N5/0) 灰白色(N7/0)	

遺物 番号	陣況 番号	図版 番号	遺物の種類 ・部類	出土遺構 ・層位	規 量 (#、g)	胎 土	焼成	色 調	備 考
5	10	32	白磁 碗	3 a層	残存高 2.9 口径 15.8	緻密	硬	内外 断面 灰白色(10Y8-0) = 灰白色(N8-0)	
6	10		白磁 碗	3 a層	残存高 3.4	緻密	硬	生地 灰白色(10Y8-1)	
7	10		瓦器 碗	3 b層	残存高 3.7 口径 13.8	緻密	軟	内外 断面 灰白色(7.5Y8-1) =	
8	10		瓦器 碗	3 a層	残存高 3.7 口径 14.1	緻密	軟	内外 断面 灰白色(10Y8-2) =	
9	10		瓦器 碗	3 a層	器高 2.3 口径 9.9	1mm程度の白色粒を含む が緻密	軟	内外 断面 灰白色(10Y8-1) =	
10	10	32	瓦器 碗	3 a層	残存高 1.8	緻密	中	内外 断面 輪灰色(N3-0) 灰白色(7.5Y8-1) =	
11	10	32	瓦器 碗	3 a層	残存高 1.1	1mm程度の白色粒を若干 含むが全体的に緻密	中	内外 断面 輪灰色(N3-0) = 灰白色(10Y8-1)	
12	10	32	瓦器 皿	3 b層	残存高 1.9 口径 9.6	緻密	硬	内外 断面 灰色(N5-0) = 灰白色(N8-0)	
13	10		瓦器 皿	3 a層	残存高 1.5 口径 8.0	1mm程度の白色粒を含む	中	内外 断面 灰白色(YR6-2) 灰白色(5 Y7-2) 灰白色(YR8-2)	
14	10	32	土師質 小皿	3 a層	残存高 1.1 口径 9.15	1mm以下の細かい砂粒 を含む	硬	内外 断面 赭黄色(2.5Y8-3) =	
15	10	32	土師質 壺	3 a層	残存高 5.5 口径 22.1	白色砂粒 絹糸 片岩 多量を含む	硬	内外 断面 濃い黄褐色(10YR7/4) = 灰色(N5-0)	
16	10		土師質 羽釜	3 a層	残存高 4.6 口径 18.2	2~3mm程度の砂粒含 む	硬	内外 断面 黄褐色(7.5YR8/4) = (10YR8/3) 灰白色(2.5Y8-2)	
17	10	32	土師質 羽釜	3 a層	残存高 6.4 口径 23.8	2~3mm程度の砂粒含 む	中	内外 断面 灰白色(10YR8-2) =	
18	10	32	瓦器 鉢	3 a層	残存高 4.85 口径 34.8	1mm程度の白色砂粒を 多量を含む	硬	内外 断面 灰褐色(7.5YR5-2) 赤色(10R5-6)	

遺物 番号	発掘 番号	図版 番号	遺物の種類 ・器種	出土遺構 ・部位	量 (g, cm)	土 質	焼成	色 調	備 考
19	11	32	土師器 壺	灰土層	残存高 6.45 口径 22.1	1～3mm程度の白色砂 粒を含む	硬	内外 断 赭灰色(7.5YR5/1) # 褐色(7.5YR4/3)	
20	11	32	灰褐色 砂流 シムト層	青灰色 砂流 シムト層	残存高 7.5 口径 25.3	1mm程度の砂粒含むも 緻密	硬	内外 断 赭青灰色(5B4/1) # 赤灰色(5R5/1)	
21	11	32	青磁 杯	青灰色 砂流 シムト層	器高 3.85 口径 11.6	密	硬	胎 初緑灰色(10GY7/1) 生地 白色	
22	11	32	青磁 碗	表層		緻密	硬	胎 オリーブ灰色(10Y5/2) 胎面 灰白色(N8/0)	
23	11	32	瓦質 鉢	青灰色 砂流 シムト層	残存高 6.1 口径 26.6	1mm程度の白色砂粒含 む	内 中 断	灰白色(N7/0) # (10Y8/1) #	
24	11	32	瓦質 茶 鉢	青灰色 砂流 シムト層	残存高 3.9 口径 33.4	緻密	硬	内外 断 赭灰色(N3/0) # 灰白色(10Y8/1)	
25	18	31	土師器 杯	80-O-S	器高 2.6 口径 11.2	1mm程度の砂粒を含む	硬	内外 断 灰白色(2.5Y8/2) # 灰青褐色(10YR4/2)	
26	18		須恵器 高杯	80-O-S	残存高 8.35	1mm以下の白色砂粒含 む	硬	内外 断 灰白色(N5/0) # 灰白色(N7/0)	
27	18		須恵器 台付異形壺	81-O-S	残存高 8.8 口径 7.9 残存高 8.4	緻密	硬	内外 断 灰白色(N7/0) # 青灰色(5P8/1)	
28	18	34	須恵器 平皿	81-O-S	器高 10.8 口径 5.6	5mm以下の白色砂粒含 む	硬	外 灰白色(N8/0)	
29	18		土師器 小皿	81-O-S	残存高 0.7 口径 8.2	1mm程度の砂粒含むが 全体的に緻密	中	内外 断 灰白色(10YR6/2) # #	
30	19		瓦質 碗	91-O-O	残存高 3.7 口径 11.8	緻密	硬	内外 断 赭灰色(N3/0) # 灰白色(7.5Y8/1)	

注1 横田賢次郎、森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集』4 1978 九州歴史資料館

2 「土師遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』50 1990 堺市教育委員会

3 『三田遺跡発掘調査報告書』1987 (財)大阪府埋蔵文化財協会

4 『上フジ遺跡発掘調査報告書』1988 (財)大阪府埋蔵文化財協会

第IV章 弥生集落の調査

第1節 東山丘陵試掘調査の概要

まず最初に、今回の試掘調査の対象となった東山丘陵について、いま一度簡単に触れておこう。東山丘陵は既に第II章で紹介したように、標高約50~160m、最大幅約200mのなだらかな丘陵である。しかしながらその両端には大小様々な支谷が発達し、複雑な地形環境を醸し出している。現在まで東山丘陵を対象とした発掘調査は、1987年近畿自動車道と歌山線岸和田インターチェンジ予定地内の調査が1度実施されたにすぎない。それだけに今回の調査に寄せる期待は大きかった。以下本節では、三田古墳周辺の試掘調査の成果をも含めて記述する。

1991年10月から実施した東山丘陵内の試掘調査は、その一部分を横断する道路予定地内を対象としたものである。ここには大小二つの支谷があり、うち一つが調査区内を横断するので、あたかも異なった二つの丘陵が存在するかのようにみえる。以下くり返すが、三田古墳の位置する尾根筋をA丘陵、和泉市との境界にある広い平坦部分をB丘陵として、調査概要の説明を加える。

試掘調査の目的は、①三田古墳以外の古墳が調査区内に存在するか否か、②丘陵斜面や

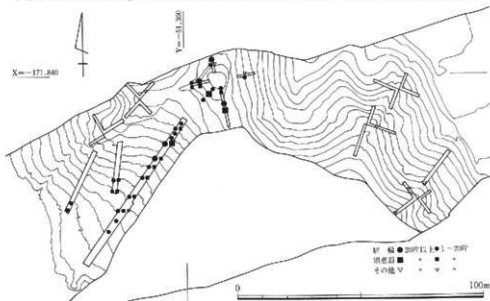


Fig. 25 試掘トレンチ (A丘陵)と遺物分布 (1)

平坦地に窯跡や高地性集落が存在するか、の2点にあった。それゆえトレンチは、尾根先端部にある古墳状を呈する地形に計9ヶ所、丘陵平坦部や斜面に計11本設定し、2つの疑問に対する解答を得るべく順次調査にとりかかった。

まず最初に調査したのは、A丘陵西斜面に設定した3本のトレンチである。本来ならば予定地内全域を対象とすべきであったが、同斜面に一部未買収地が存在したため、いささか不十分な試掘調査となった。

この未買収地に沿って設定した全長69mのAトレンチでは、最大50cmもの赤褐色土が堆積し、その下層にある黄褐色土から埴輪・須恵器片が一定量出土した。本来この斜面は緩やかな谷地形を呈していたようだが、現在ではこの赤褐色土の堆積により完全に埋没している。この土は、いうまでもなく三田古墳周囲をはじめとする尾根筋を削平して生じた土と思われる。なおB・Cトレンチでは丘陵の流土である黄褐色土のみが堆積しており、遺物もごく少量出土したにとどまった。

続いて、A丘陵東斜面及びB丘陵一帯の調査に着手した。山直谷裏側に位置するA丘陵東斜面は急峻な地形であるが、尾根状の高まりが数ヶ所あったため古墳を想定しそれぞれに「十」字状のトレンチを、斜面部には幅2mのトレンチを設定して調査に臨んだ。しか



Fig. 26 試掘トレンチ (B丘陵) と遺物分布 (2)

いずれも腐植土層直下に地山が露呈したり、数十㎝～1m余りの流土が堆積したにすぎないことが判明した。高まりはいずれも自然地形であることが明らかとなり、遺構はもちろんのこと、遺物も斜面部で近・現代の陶磁器片が出土した以外皆無であった。

一方A丘陵に面した緩やかなB丘陵西側斜面は、調査区北側の斜面が大きく削平されていたため、最もなだらかな斜面中央部に全長約55mのGトレンチを設定し調査を進めた。上層に地山削平土と思われる赤褐色土が最大1m余りも堆積し、その下層に淡黄褐色土が数十㎝認められた。遺物は上層が近・現代陶磁器のみであったのに対し、下層は少量ながら弥生土器が出土した。

続いて丘陵上の平坦面で3ヶ所試掘調査を実施した。この縁辺部には現在も機能していると考えられる里道が存在するが、そこを観察すると赤褐色を呈した地山面が露呈する。平坦面中央付近にIトレンチを、調査区南端に沿ってHトレンチを設定した。その結果H・Iトレンチの大半では、腐植土を除去すると地山面となり、Hトレンチ両端部分を除いて弥生土器はおろか遺物を見出すことすらできなかった。

Hトレンチ東端には「古墳」状の高まりがあり（9号トレンチ）、その中心には「盗掘坑」らしき跡が認められた。ただちに「十」字状トレンチを設定し調査を行ったが、盛土と思われた上は堅固に盛られたものではなく、周辺に堆積していた土を乱雑に積み上げたものにすぎないと判断するに至った。この堆積土から弥生土器が出土した以外、古墳を連想させるような須恵器や埋葬主体に用いたであろう大小の石材も皆無であった。

B丘陵内には北側に開口する小規模な谷があるため、斜面部に2ヶ所のトレンチを設定した。東側斜面（平坦面側）に設定したJトレンチには、Gトレンチと同様の土層堆積状況が観察でき、若干の弥生土器が黄褐色土層から出土した。しかし南斜面に設定したKトレンチでは黄褐色土のみが堆積し、遺物は一切出土しなかった。

最後に調査したのは、三田古墳を含むA丘陵西側斜面である。三田古墳の西側斜面にも、2ヶ所ほど小さな尾根状地形があったので、古墳の存在を想定して「十」字状のトレンチを設定した。しかしいずれも自然地形であることが判明し、今回の調査対象地内に三田古墳以外の古墳は存在しないとの結論に達した。なお三田古墳の試掘調査結果は次章で評述するので、ここでは触れない。

一連の試掘調査から以下のような判断を行った。まずA丘陵側については、三田古墳以外の古墳は皆無で、斜面・小尾根などには一切遺構は存在しないであろう。さらにB丘陵では古墳は皆無であるが、斜面などから弥生土器が出土しており、丘陵上の平坦面に高地

性集落が存在した可能性は高い。しかし腐植土直下が地山であること、里道部分に地山が露呈していること、また斜面に堆積した赤褐色土が平坦面の地山を削平した結果生じたと考えられることなどから、もはや弥生集落は残存しないとの結論に至った。なおB丘陵斜面については、傾斜度や土器の出土量などを考慮すると、住居跡が残っている可能性も考えられるとした。

東山丘陵内での出土遺物は総数1067片を数え、埴輪651片を筆頭に須恵器257片、弥生土器105片、近世陶磁器29片、その他25片である。このうち埴輪・須恵器はA丘陵西斜面から、弥生土器はB丘陵からそれぞれ出土し、それ以外は両丘陵で散見した。

このような遺物の出土傾向は、丘陵上に営まれた集落や古墳の存在を暗示する。それとともに、近・現代に至るまで、当丘陵内は居住地として利用されていなかったことを予想させる。

よって当初東山丘陵内は、三田古墳及びB丘陵斜面について1992年度に実施する発掘調査対象地として選定された。しかし実際には、B丘陵平坦地もその対象として加えられ、結果的にB丘陵全面を発掘することになった。



Fig. 27 住居跡調査風景

第2節 弥生集落の調査

1. 調査概要

ここでは試掘調査を実施した東山丘陵帯のうち、弥生土器が出土したB丘陵帯の調査概要を記す。調査はまず、丘陵内にある大きな支谷に面したB丘陵西斜面から開始した。この斜面では、既に述べたように最深部分で1m数十cmに及ぶ地山削平土と思われる赤褐色土を確認している。この斜面で出土する少量の弥生土器は、かつて存在した集落遺構の名残と思われた。

この斜面での遺構は皆無であったが、遺物は上層の赤褐色土層や下層の黄褐色土層それぞれから出土した。上層では近・現代の陶磁器類や瓦類が少量出土し、下層からは弥生土器片が広範囲にわたって少量出土した。赤褐色土層からは1片の弥生土器を見出すことができなかつたのである。このことは先に推定した「尾根上の削平」と矛盾する。つまり地山に掘り込まれた遺構を削平したのなら、そこから弥生土器が出土しなければならない。出土しなかつたことは、他の場所に遺構が遺存していることを示唆する。

調査は続いて丘陵内の支谷周辺へと進捗した。ここはB丘陵西斜面より勾配が急である。この支谷内西斜面は試掘調査で全くトレンチを設定していなかつたので、今回が初めての調査となる。斜面の堆積層は黄褐色土層のみであったが、弥生土器は1片も出土しなかつた。これに対して同東斜面は本来かなり凹凸があつたようで、その部分を中心に赤褐色土層が堆積し、結果として比較的平滑な斜面を呈していた。ここに堆積した黄褐色土層は、他の斜面と比較して著しく遺物が出土した。調査区内に設定した4m区画で、最高152片もの弥生土器片を出土した箇所があつた。上層の赤褐色土層中には、近・現代の陶磁器・瓦片のみが含まれており、遺構は皆無であつた。

次に平坦面の調査概要を記そう。まず丘陵南西隅で住居跡1-ODを検出した。実のところこの遺構は、昨年度の試掘調査でHトレンチの西側先端部にかかっていたにもかかわらず、先ほどから述べている「先入観」によって十分な確認を怠っていたのである。周辺の丘陵尾根部分では幅が狭いこともあって、基本的に腐植土層を除去すると地山面に至るという状況であつた。また遺物については、住居跡以外では全くといってよいほど出土しなかつた。

B丘陵東半の平坦部は、昨年度設定したH・Iトレンチの調査成果から、当初調査対象地に含まれていなかったところである。調査前の地形は、やや東側にゆるやかな傾斜をもっているがほとんど平坦であつた。この平坦地は、南北方向の調査区外にも若干広がるよ

うである。また当区南側市域境界付近には塚があり、「南郡三田村」「泉郡唐国村」と記された石碑がある。このあたりは、近世以降村界をめぐって争いが絶えなかったようで、付近にはこのような石碑をもつ塚が点在しているという。

さて実際の発掘に入ると、松や竹の根の除去に時間がかかり、除去に伴い大きな穴が生じることもたびたびであった。さらに試掘トレンチの調査では腐植土層直下で地山面を検出したが、全体的に黄褐色土が広範囲で堆積していることが判明した。当初遺物は東端付近の傾斜部分で比較的多く出土した以外、ほとんどなかった。しかし結果的に一帯は最も遺物の集中した部分となった。今回の調査で検出した遺物は、丘陵縁辺部を中心に竪穴住居跡5棟、土坑数基、柱穴数十基などである。

丘陵平坦面上や斜面に堆積している黄褐色土層中から出土した弥生土器は、破片数にして710片におよぶ。しかしそのすべてが特徴的な破片とは限らないので、正確な器種別個体数を把握するには至っていない。

一方出土した土器の大半は赤褐色を呈しており、丘陵を構成する地山粘土を利用して製作したかとも思える。しかし量的にはごく僅かであるが胎土を異にする土器群が見出される。これらは当地に居住した弥生人の母村から持ち込んだものかもしれない。

2. 包含層出土遺物

丘陵平坦部および斜面に堆積した黄褐色土から、弥生土器やごく少量の須恵器が出土したが、いずれも細片だったため図化するものは非常に限られてしまった。

口縁部破片は壺形土器3点、甕形土器1点を図化した。壺形土器は口縁部に数条の擬凹線を施し、(33)のように円形浮文を付けるものもある。いずれも器表面の剥離が著しい中、(31)は内外面に施されたヘラミガキが比較的顕著に観察できる。図示した甕形土器(34)の口縁端部には刻み目を入れる。

手埴形土器片(35)はこの1片のみ確認した。高杯形土器の脚部片は24片出土している。その他甕(38・41)はこの2点を確認したにすぎないが、壺・甕形土器の底部は比較的出土している。

一方若干ながら出土した須恵器はいずれも図化できなかったが、器種としては甕・杯・甕があり、古墳の存在を暗示させるかのようである。

3. 出土遺物の組成と平面分布

弥生集落全体での出土遺物総数は1990片を数える。このうち弥生土器は、出土総破片数1893片中64%にあたる1214片が遺構から出土している。これに対し、サヌカイト剝片類・須恵器・近世陶磁器・近世瓦は、それぞれ6・61・17・13片しかない。

このような遺物組成は、当集落の立地的特徴をうまく表現する数値として注目される。つまり、当丘陵が主として弥生時代の集落として利用された以外、ほとんど住居空間に用いられなかったのである。

最後に出土遺物の平面分布に触れておこう。弥生土器は調査区全域で出土したわけではない。遺構近隣および斜面地の一部にほぼ限定される。

遺構—住居跡—の場合、例えば、試掘調査時に設定したIトレンチは後述する2-ODのごく傍であったが、全く遺物は出土していない。これは、腐植土層直下にほとんど包含層がなく地山に至るということも関係しているのかもしれない。

一方斜面の場合も、住居跡の下方でしか出土していないのである。つまり平坦面で遺構のない場所では全く遺物も出土しない。換言するとこのような状況は、後世の攪乱を一切受けていないということになるうか。

なお須恵器は丘陵斜面からの出土はなく、おもに調査区南東隅付近で多くみつかった。

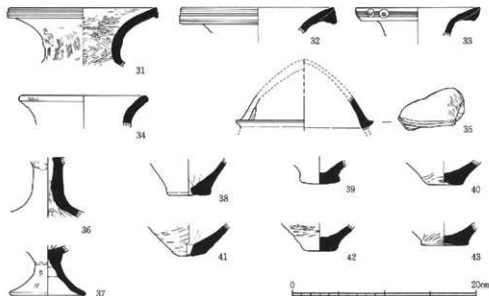


Fig. 28 包含層出土遺物

4. 検出遺構

以下竪穴住居跡を中心に各遺構の様子を記載する。

1-O-D 丘陵南西隅で検出した一辺6.2mの隅丸方形の住居跡である。遺構は地山面

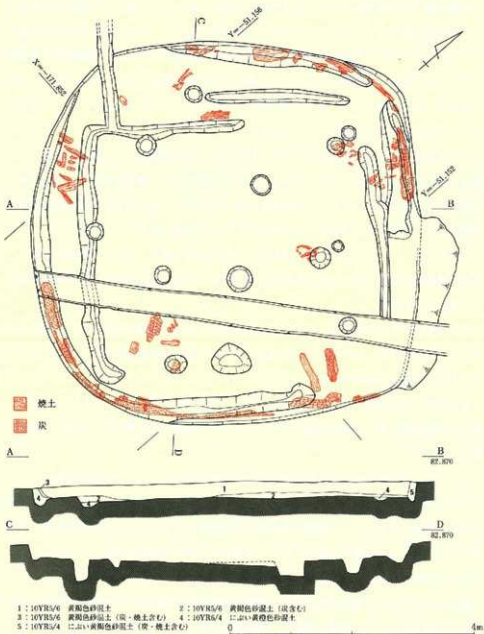


Fig. 29 1-O-D

から切り込んでいるが、検出時は黄褐色の埋土に炭化材や焼土などが混入したり、壁面が赤く焼けていたりしており、焼失住居であることを物語っていた。

炭化材は住居内において不規則な状態で散見されたが、その中で特徴的なのは、住居跡の壁際に所々炭化材が貼り付いたような部分が認められたことである。これに対し梁材など上部構造を構成すると思われる材の出土は極めて少ない。いずれの炭化材も住居床面上では出土していないことから、消失後ただちに落下したのではなく、時間的開きを想定することができる。また焼土ブロックの下部から炭化材を検出したこともあったが、土が本来屋根に乗っていたのか、消火の際に用いた土なのか、いずれとも断定することはできない。埋土は基本的に黄褐色土のみである。

さて住居内で検出した施設は以下のとおりである。まず壁際に沿って溝が巡るが、この溝は全周するものではない。その内側にも方形に途切れながら巡る溝がある。両方の溝とも埋土に炭が混入することから、同時並存の溝と思われる。また両者とも住居跡東西隅で途切れることから、その部分を入口と想定することも可能である。

柱穴は全部で11カ所確認したが、掘形の平均直径は30cm前後・深さは平均30cmと深い。柱根は確認できなかった。これらの柱穴は主たるものが6本、あたかも1×2間分の掘立柱建物のように並ぶ。

炉は中央からやや南寄りで、それらしきものを検出した。直径約40cmの円形で、薄い炭・焼土層が確認できる。他の住居跡とは異なりここから延びる排水溝はない。なお床面には貼り床などの加工は認められなかった。

遺物は埋土中に遊離した状態で出土しており、床面に接した状態で出土したものはない。また北西側壁面に接した状態で砥石が出土したが、その破片が住居内の1m余りの範囲に散乱していた。

2-O-D 最大幅10mの焼失住居跡であるが、後世の削平によって本来の平面プランのほぼ北半分が消滅している。残存部分からの復元を試みると、平面形は一見ほぼ円形を呈するが、幅約1mのベッド状遺構がおおよそ八角形を呈するらしく、その影響を受けて外壁に若干角ばっている部分が認められる。本来は不定形な八角形を呈していたらしい。この住居跡の埋土は数層にわたるが、基本的には黄褐色土に焼土や炭片が混入する。

壁面はいずれもよく焼け赤色を呈し、平面で確認すると最大5～7cm幅の筋が約6mにわたって確認できた。その焼土部分は、他の部分に比べて粒子の細かい均質な土（もしくは粘土）である。この焼土の筋を取り除くと炭化物で埋まった壁溝が現われた。しかし、

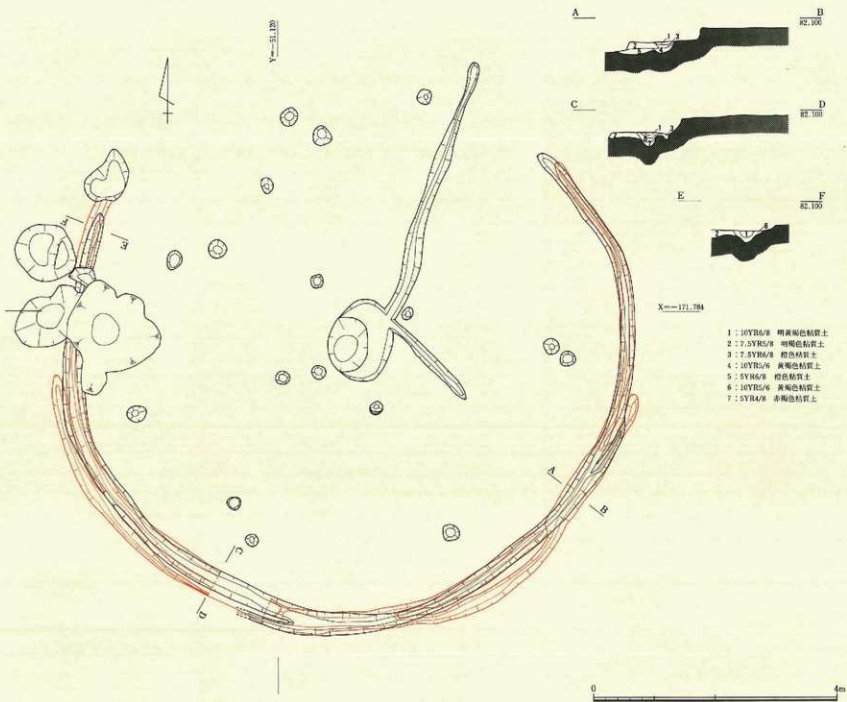


Fig. 31 2-OD (2)

この「焼土帯」を積極的に壁材と判断する根拠はない。

床面は、ベッド状遺構の部分に限り厚さ10cm余りにわたって盛土を施していたが、その他の部分では一切そのような痕跡は認められず、また焼けた痕跡も確認されなかった。

このベッド状遺構内を掘り下げると、ほぼ同位置に巡る壁溝が切合い関係をもって4条検出した(1期～4期)。いずれも円形をなしていることから、本住居跡は当初は円形住居で、その後壁溝部分を4回改修して、最終的に多角形のベッド状遺構を持つ住居(5期)へと変化しらしい。

住居内床面で検出した柱穴のうち、ベッド状遺構上から掘り込まれたもののみ5期の住居跡に伴うもので、それ以外の柱穴は1～4期の円形住居に関わるものと思われる。しかし炉周辺で検出した柱穴には建替えた痕跡がないことから、これらは、5期の住居跡にのみ伴う柱穴と考えることもできる。

この住居跡も他と同様火災にあっており、先に記したように焼土や炭片・炭層は認められるが、焼失住居4棟中最も炭化材の遺存度が悪かった。つまり火災による住居放棄の際、もしくはその後住居内がきれいにかたづけられた可能性もある。

なお、非常に堅固に焼け締まった焼土塊をベッド状遺構上面で検出した。平面形は一辺約50cmの正三角形を呈し、厚さ約10cmを測る。断面を観察すると、一度に成形したのではなく、何回か「重ね焼き」されたかのような縞模様が見られる。

さて住居跡から出土した遺物には、土器片や銅鐸形銅製品などがある。土器は壺口縁部がまとまって出土した以外、すべて破片が埋土中に遊離した状態で出土した。銅鐸形銅製品は堅固な焼土塊に接し、裾を斜め上方にむけて出土した。出土時は非常に薄い器壁のうえに腐食がかなり進んでいたため、無傷で取り上げることが不可能であった。この銅製品に関しては第VII章第5節を参照願いたい。

その他粘土塊や不明土製品が出土した。前者は銅製品が発見された一角の、床面から5cmほど浮いた位置でみついている。出土当時一見大形の円礫のようであった。表面には幅1～3mm程度の沈線状の筋が認められるが、布袋などのしわを反映しているのだろうか。東大阪市鬼塚遺跡⁽¹⁾や兵庫県熊内遺跡⁽²⁾・川除藤ノ木遺跡⁽³⁾などで出土例の報告がある。

後者は厚さ2cm余りの円筒状のもので、外面は赤褐色を呈し、あたかも高温で焼けたような印象を与える土塊で、断面は青灰色を呈する。胎土はきめ細かい砂粒からなる。これがはたして製品なのか偶然の産物なのかは不明である。これも銅製品出土場所付近でみつけた。

3-O D 調査区北端で検出した4.5m×4.7mの方形住居跡で、北および西側に幅約1mのベッド状遺構を有する。この住居跡も壁面の一部は焼け、床面には屋根材と思われる炭化材や焼土が放射状に散乱していた。また壁際に沿って炭化材や焼土が部分的に認められた。

中央には炉があり、その周囲には幅約10cm・高さ3cm程度の炉堤がある。深さ約20cmもある「排水溝」は、この炉から北西コーナーに向かって延びる。この埋土上層には炭が混入していた。また炉から南側に延びる溝があり、南壁付近にある土坑につながる。柱穴は、ほぼ同じような位置に合計4本ある。

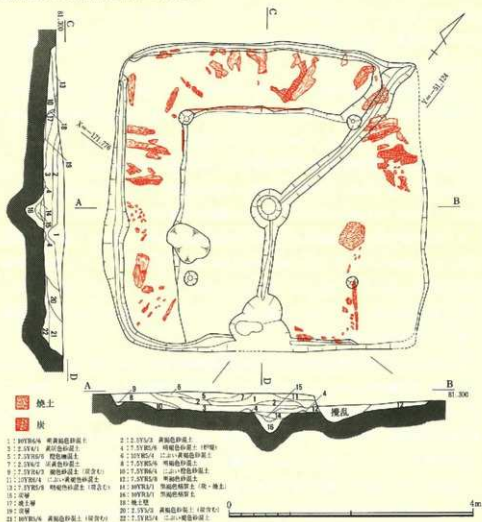


Fig. 32 3-O D

出土遺物は土器のみである。うち幾つかは埋土中に遊離した状態で出土したが、南壁付近の土坑から数個体分の土器（完形品ではない）がまとまってみつかった。

4-OD 里道によって西半分が削平された状態で検出した。柱穴跡は全部で3ヵ所確認できたが、炉は削平のためか発見できなかった。

残存部分はわずかであったが、壁溝が一辺約3.5mごとに角を有すること、柱穴がこの角に対応して配置されていることから、六角形を呈していた可能性がある。

この住居跡もまた、本米の床面や少し浮いた状態で多量の炭化材が放射状に出土したことから、火災によって焼失したことは明らかである。焼土は3-OD同様、炭化材の上で検出した。さてこの住居跡の壁を観察すると、直径5mm程度の中空の炭化物が散見できる。どうも「簀の子」状のものを壁際に埋め込んでいたらしい。また隣接して、幅4cm程度の中空の炭化材（竹の断面か？）も確認できた。火事の際、蒸し焼き状態になり、かろうじてその痕跡を止めたのだろうか。遺物は土器片のみが遊離した状態で出土した。

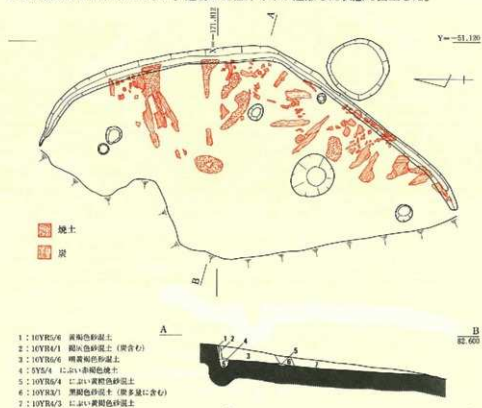


Fig. 33 4-OD

5-OD 4-ODの北側に隣接して検出した住居跡で、やはり里道によって西半分が削平されている。他の4棟の住居跡が焼失住居であるのに対し、この住居跡のみ火災にはあっていない。残存した部分がほぼ半円形を呈することから、この住居跡の平面形は本来円形であったと推定される。柱穴は3ヵ所確認したが、その間隔からみて6ヵ所あったものと思われる。復元すると直径約8mの円形住居となる。

炉については、推定住居跡中央部分を中心に丹念に調査したが、排水溝も含めてついに検出することができなかった。

壁際には部分的に壁溝が残存し、そこから円礫に混じて土器片が出土している。貼床の痕跡はなかった。

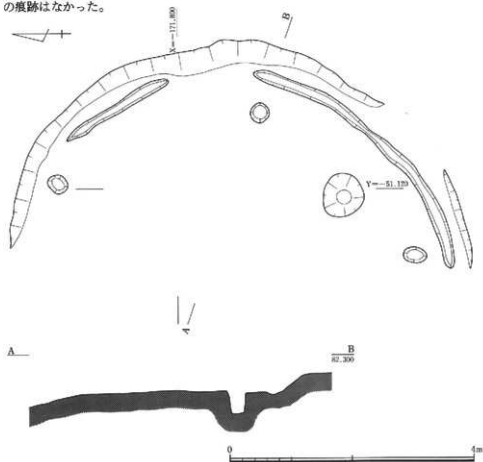


Fig. 34 5-OD

5. 各住居跡出土遺物

1-O-D出土遺物 住居内埋土から弥生土器片127片と、壁際で砂岩製の砥石1点が出土した。しかし土器片はその大半が細片化しており、時期を明示するような特徴的な遺物に極めて乏しい。(46)は唯一復元できた小形鉢で、灰白色を呈したきめ細かい胎土である。

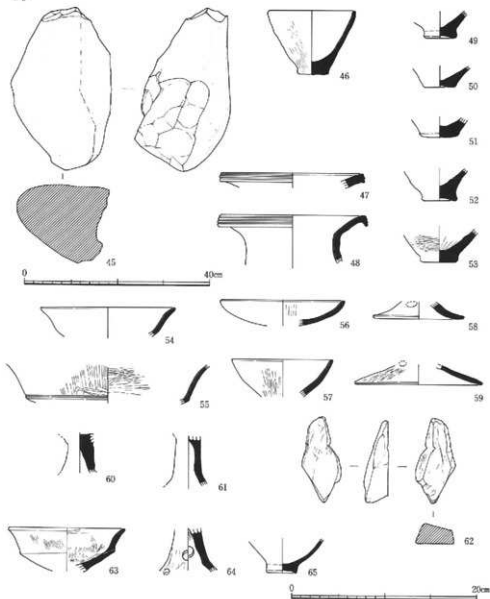


Fig. 35 各住居跡出土遺物

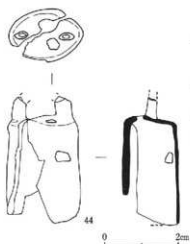


Fig. 36 銅鐻形銅製品

砂岩製砥石 (45) は、欠損して生じた剥片が住居内埋土からかなり出土している。

2-O-D 出土遺物 銅鐻形銅製品 (44) は、すでに鈕や身の一部が欠損していたので本来の大きさは不明確であるが、現存長が3.5cmあるので復元すると4.5cm程度になるかと思われる。

欠損した紐の断面形は菱形を呈するが、菱環鈕というより成形段階での加工によって最終的にこのような形状になったものと思われる。

身が完存していないため内突起の有無など詳細は不明だが、この銅製品は小さいながらも一對の舞孔と型持孔があり、銅鐻と同じ方法で製作されたい。

しかし身の厚みが一定していないことから、製作時中子が不安定な状態であったと考えられる。外面には施文された痕跡は一切認められない。内外面とも錆に伴う青緑が全面に広がるが、火災を直接受けた側は黒色っぽく変色している。

出土土器は539片を数えるが、その大半が細片化した状態で出土しているため、具体的な器種構成などは不明である。この中で (48) は図化した口縁部のみが正位置状態で出土した。また (61・62) はベッド状遺構内から出土したものである。

当住居跡から出土した土器片をみる限り、他の住居跡に比べ時間的ばらつきが最も大きいようである。

図示していないが、粘土塊について簡単に触れておこう。直径約20cm・高さ約20cmの粘土塊は出土当初灰色であったが、乾燥させると火災を受けたことを物語るかのように淡褐色を呈した。胎土にはほとんど砂粒を含まない。

表面には先に述べた「しわ状の筋」のほか、幅1cm程度の筋状の凹みが観察できるが、本来縄のようなもので縛られていたのであろうか。

3-O-D 出土遺物 出土した破片数は377片であり、住居内の土坑より数個体分の土器が出土したが、図化できたのは (63) の高杯杯部片である。

4-O-D 出土遺物 出土遺物は少量の土器片 (67片) のみである。

5-O-D 出土遺物 67片出土したが、図化できたのは壁溝内から出土した (64・65) の2点である。いずれも器壁の剝離が著しく、調整など一切不明である。

6. その他の遺構・遺物

73-00 4-O D付近で検出した土坑である。75cm×50cmの楕円形をしており、埋土中から弥生土器片が出土した。土墳墓のようなものであろうか。

105-05 調査区南東隅で検出した溝で、全長約15m、幅3～5mの規模をもち円弧状に残る。この辺りには調査前、一見円墳状の高まり（9号トレンチ）と調査区外に塚があったが、昨年度の試掘調査で前者は古墳ではないとの結論に達している。今回発掘に際しては隣接する塚との関係も考慮したが、古墳としての輪郭をつかむことはできなかった。なお須恵器杯が伏せた状態で出土した。

遺物は溝内から出土した杯（66）1点である。完形品ではないが全体の2/3程度遺存する。立上りは極めて低く、底部も丸みが強い。TK209頃か。

塚 道路予定地内に位置するが、和泉市側にあるため今回の調査対象とはならなかった。現状は、やや盛り上がったところに伏鉢状の盛土を施し、その中央に石碑を立てている。石碑の北側に「南郡三田村」、南側に「泉郡唐国村」と彫り込まれているが、唐国村の「村」字は土中に埋没していた。

さてこの塚周辺から、須恵器杯・甕・甕などの破片がかなりまとまって表採された。古墳の存在を想定し、調査区端でもあったのでかなり慎重に掘削したが、締め固めた土層の存在や墓壇ライン・大形石材はなく、結果的に地山に至ってしまった。

この部分の断面を観察すると、丁寧とはとうてい言い難い雑な盛土で、盛土最上層にのみ須恵器片が含まれ、それ以外の層では弥生土器の細片が混じていた。

もしこの塚が墳丘ならば105-05は、あたかも周溝のようにもみえる。またこの遺構から須恵器杯身が1個体分出土している。盛土・溝・須恵器といった資料は、この塚周辺に元来古墳があったことを示すものといえよう。

しかしこのような雑な盛土は古墳築造に相応しくない。周辺では古墳候補地としてB2～4号地点が調査されているが、古墳と断定するには今一つ不明瞭だといふ⁽⁴⁾。この塚も現段階では古墳と断定することを留保し、将来の調査に委ねたいと思う。



Fig. 37 105-05出土遺物

92-0F 調査区南端付近で2間分を検出した。柱間は1.85m間隔である。

112-0F 105-05に近接して検出した溝跡で、調査区内では3間分を確認している。92-0Fに比べて柱間が広く、2.9～3.5mを測る。

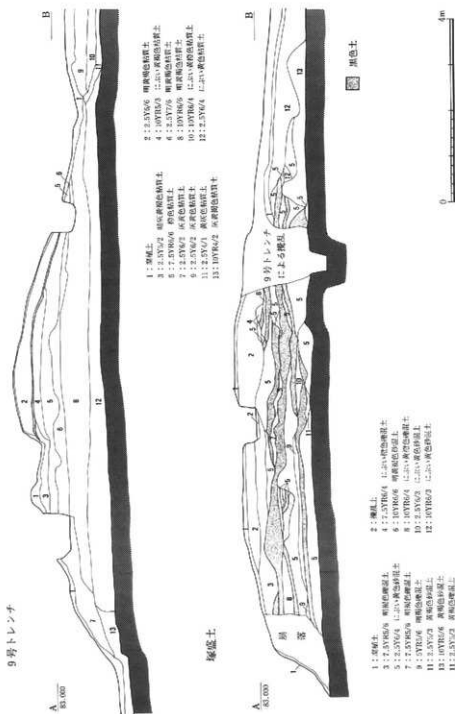


Fig. 38 9号トレンチ及び塚断面

柱穴群 丘陵平坦部で検出した柱穴群は濃然とあるのではなく、ある程度かたまって存在する。その位置は2-4-OD周辺と調査区南東端部である。

2・3-OD西側には合計6基の柱穴を確認した。斜面の凹凸に沿った櫛とも考えることができる。柱穴径は約10cm・深さ10~20cmである。また3-OD北東側でも柱穴6基を検出したが、上記で櫛とみなしたものに比べ規則性がない。

4-OD周辺でも柱穴8基を確認した。これらのうち斜面側にあるものは、その位置からみて住居を構成する柱穴と思われるが、反対側にある一群の帰属は不明である。

調査区南東にある105-O S周辺にもまとまった柱穴がある。特に92-O Fと112-O Fの間には7基の柱穴が方形にまとまっており、倉庫跡とみなすことも可能である。

Tab. 2 弥生集落出土土器観察表

遺物 番号	採出 番号	図版 番号	遺物の種類 ・器種	出土遺物 ・部位	注 量 (#, g)	胎 土	焼成	色 調	備 考
31	26	33	弥生土器 壺	黄褐色土層	残存高 6.4 口径 15.9	密 0.1~1.0mmの白・ 灰・黒色粒含む	硬	内 褐色(5 YR6/6) 外 明赤褐色(5YR5/6)	
32	26	33	弥生土器 壺	黄褐色土層	残存高 2.7 口径 16.65	密 2・3・5mm黒色 粒、7mm中粒含む	硬	内 褐色(7.5YR6/6) 外 明赤褐色(5YR5/6)	
33	26	33	弥生土器 壺	黄褐色土層	残存高 3.1 口径 13.6	密 1.5~2.3mm黒色粒、 3.5mm白色粒含む	硬	内 褐色(5YR6/6) 外 浅黄褐色(10YR6/4)	
34	26	33	弥生土器 壺	黄褐色土層	残存高 3.2 口径 13.65	密 2・3・5mmの白色 粒、1~2mmの黒色 粒含む	硬	内 浅黄褐色(10YR6/4) 外 明赤褐色(5YR5/6)	
35	26	33	弥生土器 手切形土器	黄褐色土層	残存高 3.9 口径 15.1	中々粗 0.1~1.5mmの 白・灰・黒・褐色粒含 む	硬	内 浅黄褐色(10YR6/3) 外 明黄褐色(10YR7/6)	
36	26	33	弥生土器 高杯	黄褐色土層	残存高 6.35	中々粗 0.1~5.0mmの 白・灰・黒・茶褐色な どの砂粒を多く含む	硬	内 ぶい・褐色(5YR6/4) 外 明赤褐色(5YR5/6)	
37	26		弥生土器 高杯	黄褐色土層	残存高 5.34	中々粗 0.1~2.0mmの 白・灰・褐色粒含む	硬	内 ぶい・褐色(5YR7/4) 外 明赤褐色(5YR5/6)	
38	26		弥生土器 壺	黄褐色土層	残存高 4.65	中々粗 1~5mmの白・ 褐色粒含む	硬	内 黄灰色(2.5Y5/1) 外 褐色(7.5YR7/6) 暗灰黄色(2.5Y5/2)	
39	26	33	弥生土器	黄褐色土層	残存高 2.6	密 3.5mmの黒色粒小 粒、3mm白色粒含む	硬	内 褐色(5 YR6/6) 外 浅黄褐色(10YR6/4)	

遺物 番号	調査 番号	遺物の種類 ・部位	出土遺構 ・層位	出量 (m, g)	土	硬度	色 質	備 考
40	28	33	弥生土器 黄褐色土層	残存高 2.7	やや粗 0.1~3.0mmの 白・黒・褐色粒たくさん含む	硬	内 外 新 にぶい黄褐色(10YR8/3) * 灰黄褐色(10YR5/2)	
41	28	33	弥生土器 黄褐色土層	残存高 3.75	密 0.1~1.0mm白・黒・ 茶色粒含む	硬	内 外 新 褐色(5YR8/6) * *	
42	28	33	弥生土器 黄褐色土層	残存高 3.0	密 2.5mmの黒色小粒、 2~3mm, 4mmの白色 小粒含む	硬	内 外 新 にぶい黄褐色(10YR7/4) 褐色(5YR8/6) にぶい褐色(7.5YR5/4)	
43	28	33	弥生土器 黄褐色土層	残存高 2.5	粗 0.1~3.0mmの白・ 黒・灰・茶褐色粒を多 く含む	硬	内 外 新 灰白色(2.5YR/2) * *	
46	35	34	弥生土器 小形鉢	1-O-D 器高 7.1 口径 9.4	密 1.0~3.5mmの黒色 粒を含む	硬	内 外 新 灰白色(10YR8/2) 明黄褐色(10YR8/4) 灰白色(7.5YR8/2)	
47	35	33	弥生土器 壺	2-O-D 残存高 1.7 口径 15.6	密 0.1~2.0mmの白・ 黒・灰色粒含む	硬	内 外 新 灰黄褐色(7.5YR/3) * 明赤褐色(5YR5/6)	
48	35	34	弥生土器 壺	2-O-D 残存高 5.45 口径 15.8	粗 3.0~6.0mmの黒色 粒、1.0~5.0mmの白色 粒含む	硬	内 外 新 褐色(7.5YR/6) 明赤褐色(2.5YR5/5) 褐色(7.5YR/6)	
49	35	33	弥生土器	2-O-D 残存高 3.0	粗 0.1~7.0mmの白・ 褐色粒含む	硬	内 外 新 灰黄褐色(10YR8/2) * 灰黄色(2.5YR/3)	
50	35	33	弥生土器	2-O-D 残存高 2.45	密 0.1mmくらいの白色 粒少し含む	硬	内 外 新 褐色(7.5YR7/6) 褐色(5YR7/6) 黄褐色(10YR6/4)	
51	35	33	弥生土器	2-O-D 残存高 2.2	粗 0.1~3.0mmの白・ 黒・灰・褐色粒多く含 む	硬	内 外 新 にぶい黄褐色(10YR7/4) * 褐色(5YR6/6)	
52	35	33	弥生土器 べつ状 遺構堆土上	2-O-D 残存高 3.5	密 2.5mmの黒色粒含 む	軟	内 外 新 明黄褐色(10YR7/6) * *	
53	35	33	弥生土器	2-O-D 残存高 3.65	密 5.0~6.0mmの黒・ 白・薄茶色の小粒含む	内 外 新	にぶい黄褐色(10YR7/4) 明黄褐色(10YR7/6) にぶい黄褐色(10YR7/4)	
54	35	33	弥生土器 高杯	2-O-D 残存高 3.25 口径 14.4	密 0.1mm程度の白・ 黒・褐色粒少し含む	硬	内 外 新 黄灰色(2.5Y/1) * 灰白色(2.5YR/2)	
55	35	33	弥生土器 高杯	2-O-D 残存高 4.3	密 0.1mmくらいの白・ 灰・褐色粒少し含む	硬	内 外 新 灰黄褐色(7.5YR8/4) * 灰黄色(2.5Y7/4)	

遺物 番号	群 番号	30期 番号	遺物の種類 ・器種	出土遺構 ・層位	径 (cm, g)	形	土	状況	色 調	備 考
56	35	33	弥生土器 高杯	2-O-D	残存高 2.75 口径 13.5	瓶	0.1~1.5mmの白・ 黒・灰・褐色粒含む	破	内外 胎 灰黄色(2.5YR8/3) 胎 赤褐色(5YR6/4) 胎 赤褐色(10YR5/4)	
57	35	33	弥生土器 高杯	2-O-D	残存高 4.1 口径 11.0	瓶	0.1~2.0mmの白・ 灰・黒・赤(わずか) の砂粒含む	破	内外 胎 緑色(7.5YR7/6) 胎 赤褐色(10YR8/4) 胎 浅黄褐色(7.5YR8/4)	
58	35	33	弥生土器 高杯	2-O-D	残存高 2.9	甕	0.1~1.0mmくらい の白・黒色粒含む	破	内外 胎 緑色(5YR7/6) 胎 胎 赤褐色(10YR8/4)	
59	35	33	弥生土器 高杯	2-O-D	残存高 14.0	甕	0.1~1.5mmの白・ 黒色粒含む	破	内外 胎 赤褐色(10YR7/4) 胎 胎 オリーブ黒色(10Y3/1)	
60	35	33	弥生土器 高杯	2-O-D	残存高 4.2	甕	2.0mmの白色粒含 む	破	内外 胎 黄褐色(10Y8/8) 胎 緑色(7.5YR6/6) 胎 緑色(3.5YR6/6)	
61	35	33	弥生土器 高杯	2-O-D ベッコ次 遺埋埋土中	残存高 5.4	甕	3.5mmの白色粒、1. 0~2.0mmの白・黒色粒 含む	破	内外 胎 緑色(7.5YR7/6) 胎 明赤褐色(2.5YR5/8) 胎 緑色(5YR6/6)	
63	35	34	弥生土器 高杯	3-O-D	残存高 4.75 口径 12.45	甕	0.1~1.0mmくらい の白・黒・褐色粒少量 含む	破	内外 胎 黄褐色(2.5Y5/1) 胎 胎 浅黄褐色(7.5YR8/3)	
64	35	34	弥生土器 高杯	5-O-D	残存高 4.82	瓶	0.1~1.0mm白・黒 色粒含む	破	内外 胎 赤褐色(7.5YR7/4) 胎 胎 緑色(7.5YR6/6)	
65	35		弥生土器	5-O-D	残存高 3.6	瓶	0.1~2.0mmの白・ 灰色粒含む	中	内外 胎 緑色(5YR6/8) 胎 胎 明褐色(7.5YR8/6)	
66	37	34	須賀器 杯	105-O-S	器高 4.3 口径 13.05	瓶	0.1mm程度の白色 粒、0.15mm程度の黒色 粒を含む	破	内外 胎 灰オリーブ色(5Y6/2) 胎 胎 灰色(5Y6/1)	

注1 『鬼塚遺跡Ⅱ 若江遺跡』1979 東大阪市遺跡保護調査会

2 『くもち 熊内遺跡現地説明会資料』1991 六甲山館遺跡調査会

3 『川除・藤ノ木遺跡』1992 兵庫県教育委員会

4 『和泉丘陵の古墳』1992 和泉丘陵内遺跡調査会

なお弥生土器については、大阪府教育委員会宮崎泰史氏よりご教示いただいた。

第V章 三田古墳の調査

第1節 はじめに

1. 三田古墳とは

東山丘陵上に位置する三田古墳に関する記録は、『和泉志』の「高塚有二一在尾生村、一在三田村」を初現とする。その後長らく注目されることなく時を経たが、1925年に刊行された『泉南記要』では、当時としてはかなり詳細な記録をとどめている。以下その記事を紹介する。

「山直下村大字三田の南東六町許、字東山と称する丘阜上にあり、古墳の全部殆んど開拓し、原形明ならず、墳頂埴輪円筒排列の跡存し、祝部土器の破片散乱す。」(原文旧字)つまり本書では、削平のため墳形は不明であるとしたが、埴輪列は遺存し須恵器片が散乱していることを指摘する。

続いて1929年に刊行された『大阪府史跡名勝天然記念物』第四冊や、1936年刊の『山直郷土誌』にも三田古墳についての記事はあるが、基本的にこの『泉南記要』を引用したにすぎない。

第二次世界大戦後、1978年発行の『岸和田市史』第1巻に紹介されることとなった。その内容に注目すると、付近で採集された埴輪片や須恵器片から6世紀代の古墳とみなされ、大形の石材などの露出もないことから主体部は木棺直葬と推定する。しかし埴輪列の痕跡はもはや認められなかったようだ。

このように三田古墳は、泉州の一小墳であるにもかかわらず、江戸時代より人々の目に止まり今日に至ったのである。

2. 調査前の状況

『泉南記要』にもあったように、三田古墳は墳丘裾部が著しい削平を受けたため、墳形を類推するには大変困難な状態であった。特に古墳北側は斜面であることもあいまって、2mあまりの崖面を呈していた。この削平が正確にいつ頃から行われたのか、全く記録されていないが、地元の77才になる古老が語ってくれたところによると、幼少時墳丘周囲には確かに埴輪列が遺存したこと、墳丘改変の理由として竹の子栽培によるという。この話は先の文献の記載と一致する。さらに周囲の尾根筋は三田古墳同様ことごとく削平されて

おり、かつてはかなり竹の子栽培が盛んであったことを物語る。

現在の三田古墳周辺は一面竹林で覆われているが、栽培というよりはむしろ放置状態である。この竹林の間に枯れた松が残っていることから、比較的近い過去に一次林が形成されたことがわかる。どうも当地一帯もかつては地元特産の果樹栽培が行われていたようだ。また古墳西側斜面が比較的なだらかであったのに対し、東側斜面はかなり急勾配であった。これは旧地形もさることながら、既述の竹の子栽培に原因がある。

三田古墳周辺にも古墳状隆起が数ヶ所で認められたが、あるものは用地外にあり、またあるものは第IV章で述べたように自然地形であった。つまり今回の調査では三田古墳以外に古墳を発見することができなかったのである。

さて竹に覆われた三田古墳の墳頂部は比較的平坦で、乱掘坑らしき掘りは認められなかった。しかし墳丘にも容赦なく竹の根が張り巡り、調査の困難さを印象づけた。さらに主に竹の葉からなる腐植土もかなり堆積しており、容易に遺物発見することを阻んだ。

3. 試掘調査の成果

前章でも触れたように、三田古墳の調査に先立ち丘陵部一帯の古墳状隆起に対して、試掘調査を実施した。もちろん本古墳もその実態をある程度把握するために、墳丘にトレンチを設定し調査に臨んだ。以下試掘調査の結果を紹介する。

調査は、古墳周囲に生い茂った竹の伐開から始まった。伐開後改めて古墳を眺めると、伏鉢形に盛り上がった墳丘と痛々しいまでに削平された墳丘裾部が印象的であった。ただちに墳頂部に中心点を設け、そこから4方向に幅1mのトレンチを設定し、盛土の遺存状態、墳形及び墳端の確認を主たる目的とした試掘調査に入った。

その結果、腐植土直下はかなり良好な状態で盛土が残っていること、南側トレンチでは掘割りから、西側トレンチでは地山傾斜変換点からそれぞれ判断して、直径または一辺約18mの規模を有することを確認した。埋葬主体については、墳丘高や大形石材が露出しなかったことなどから、木棺直葬である可能性が高いと判断した。また墳丘南側の尾根上に周溝を確認し、その墳丘側に埴輪列を発見した。さらに墳丘南側トレンチの墳頂付近で平安時代初頭の須恵器壺が出土し、再葬墓として利用されていたことも合せて判明した。

問題の築造時期であるが、主に出土した須恵器から6世紀中葉以降と判断した。これらの須恵器には、有蓋高杯・器台・甕・杯などが含まれていたが、いずれも墳丘斜面の腐植土層などから発見されており、墳丘祭祀が執り行われていたことも予想された。

4. 調査上の誤認

削平と竹で墳丘を著しく改変された三田古墳ではあったが、墳頂部分は乱掘壊らしき跡もなく、「処女墳」の可能性を秘めていた。しかし竹や腐植土層を除去した段階で、墳丘西側に大きな凹みの存在が明らかとなり、やがてその輪郭も把握するに至った。

その頃、墳丘南側では2列に並んだ小口横みの円礫も検出した。凹みを後世の攪乱とみてその掘削を後回しにし、後者を墳丘中央部に位置するであろう中心主体に追従する埋葬施設とみて、墓墳の把握と合せて「内部」の調査を進めた。

結果的にはこの凹みこそ、後世破壊された横穴式石室の残骸であり、「埋葬施設」こそ羨道だったのである。ここでは墓墳検出にこだわるあまり、①この両者の関係を十分に把握せず、横穴式石室の存在を見逃したこと、②発掘手順を逆にしてしまったことを明記し、貴重な情報を無にする基礎的なミスがあったことを、最初に断わっておきたい。

第2節 墳丘

1. 墳形

試掘調査を通じて三田古墳の規模は把握できたが、墳丘周囲の約2/3が削平されていたこともあり、墳形については容易に判断することができなかった。

そこで墳丘部分は、平均約10cm堆積した腐植土を除去して古墳本来の盛土を露出させ、墳丘周囲については地山面まで掘り下げることにした。古墳周辺の竹の根についてはある程度重機によって最小限の処理をしたが、墳丘部分の根に対してはかなり慎重に対処したため、予想以上に時間を費やす結果となった。

一方試掘調査の際、古墳南側で確認した掘削りについては、墳形を把握するうえで重要な手掛かりを与えてくれた。この掘削りは、残念ながら墳丘南側から南西方向までしか確認できなかったが、緩やかな曲線を描いていることが明らかとなった。また完全な削平を受けた墳丘北西側でもカーブする地山面を確認し、削平を免れた北東側でも浅い掘削りを検出した。

この結果三田古墳は、直径（墳長）18mの円墳であることが明らかとなった。また墳丘南北に設けられた掘削りまで含むと、総長約22mとなる。

2. 盛土

墳丘の削平が著しかったことはすでに述べたが、墳頂部や後世の改変を免れたところで

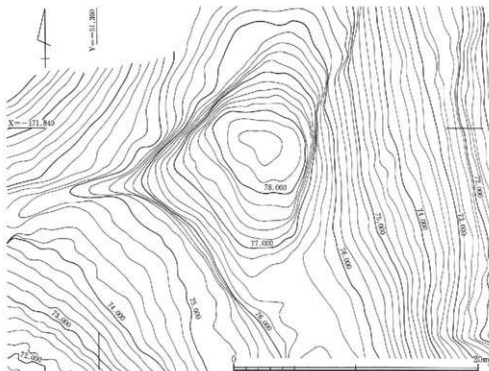


Fig. 39 調査前の三田古墳

は、結果的に盛土がかなり良好な状態で遺存していることが判明した。以下一連の調査で明らかとなったことを記そう。

まず丘陵上に築造された当古墳も、他の例にもれず自然地形を有効に活用したことが判明した。丘陵尾根先端に位置することは、平地から見上げて雄大にみせる視覚的效果を狙ったものであり、尾根筋に掘割りをつくることによってさらにそれを強調した。墳丘の基底部となる部分も、ある程度成形したであろうことはいうまでもない。

この上に施された盛土は、最大で約1 m程度しかなかったが、調査過程で非常に丁寧かつ堅固に施工されたことが判明した。地山面直上には、部分的に黒色土層が堆積している程度であった。盛土には黒色土、黄褐色土、赤褐色土（地山削平土）の3種類の土を用いる。特徴的な盛土は墳丘一帯で確認できたが、中でも墳丘東側断面で顕著であった。それは黒色土と黄褐色土からなるブロック状のもので、その量は一定しないものの、墓壇付近の下層のみ、墳丘中心から周囲に向かって突き固めて盛られている。

このような方法である程度円墳としての墳丘形態を整えたのち、その中心部分に墓壇を穿つ。木棺の埋納方法などは後述するのでここでは省略する。再び墓壇を埋め戻したあと

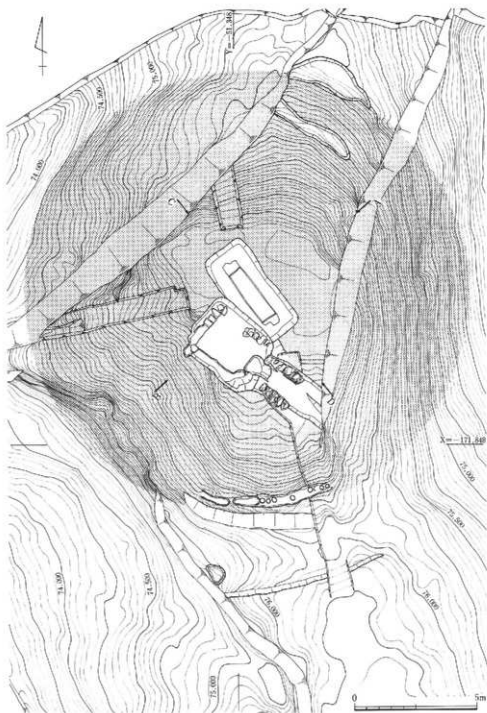


Fig. 40 三田古墳主要遺構配置圖

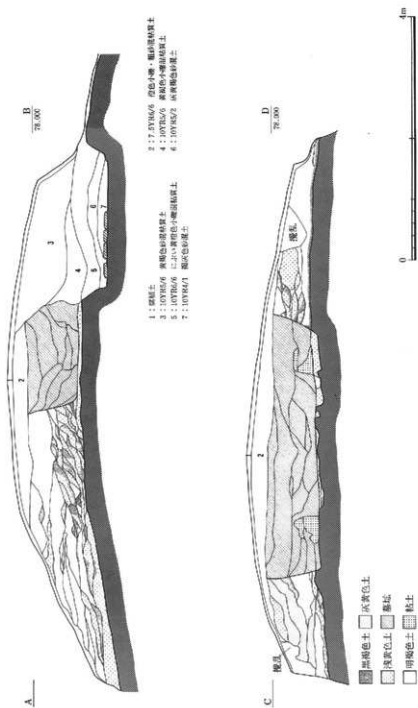


Fig. 41 墳丘断面図

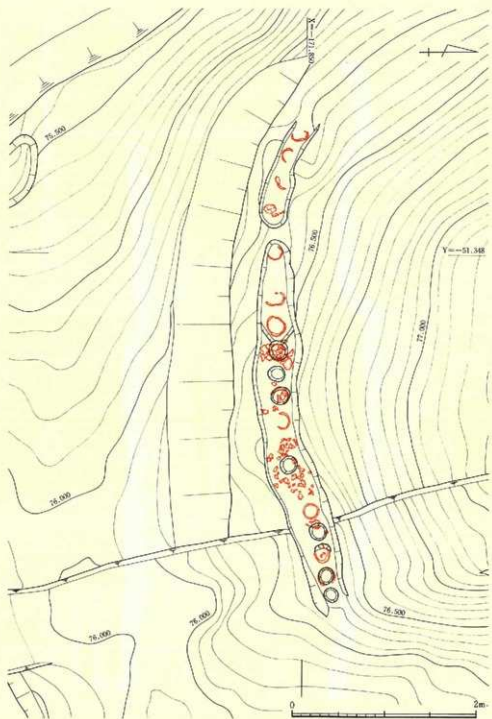


Fig. 42 埴輪列詳細圖

は、その上に数十cmの盛土を施し、墳丘を完成させたと考えられる。

3. 墳丘施設

既に述べたように、三田古墳の墳丘は後世の改変や竹林のため著しく変形していた。ゆえに当初は墳形を判断することも容易ではなかった。このような状態であったから、古墳築造当時を偲ばせるような施設等々が遺存するはずもなかった。

しかし1930年代頃には墳丘裾部に埴輪列が確認されたこともあり、その確認作業や他の施設の痕跡を把握することが急務となった。幸い腐植土層を除去する過程で、幾ばくかの新知見を得ることができた。

まずかつて存在した埴輪列の確認である。試掘調査時、墳丘南側尾根筋上でその一部を確認してはいたが、墳端付近の削平が著しいため実際の程度遺存しているのか不明であった。今回の調査では、墳丘南から南西にかけての約5.5m分残存していることを確認した。しかし最良の場合でも埴輪基部から十数cm程度残っていたにすぎず、埴輪片数片が散らばっているものさえあった。なお埴輪樹立に際しては幅40～50cmの溝を巡らせ、さらに個々の据付場所を少し掘りくぼめて、安定を図ろうとしている。ほぼ10cm間隔で据えられた埴輪は、合計20個分を確認した。

円筒埴輪の破片は墳丘周辺で一様に出土したが、墳丘西側の方が顕著であり、東側では数十片にとどまった。このことから、本来埴輪列は墳丘西側を中心に巡らされていたと想定することも可能である。しかし、西側に比べ東側の方が削平が進んでいることを加味すれば、一概にいい切ることは差し控えておきたい。

須恵質埴輪も数個体分出土している。出土位置は主として墳丘南側である。土師質円筒埴輪の間に樹立されたものであろうか。

形象埴輪－盾形埴輪－は須恵質・土師質ともにある。この破片は墳丘周辺で散見されたが、墳頂部でも小破片を採集している。円筒埴輪片が墳頂部で1点も出土しなかったことは対照的である。破片数も円筒埴輪に比べ少量であることから、その使用場所は特に限定された場所、つまり墳頂部と考えられる。

須恵器もまた墳丘周辺から出土する。その器種も甕、器台、有蓋・無蓋高杯、杯・蓋など大形から小形品まで多種多様である。これらの土器は、あるものは墳頂部に、またあるものは墓道前面に置かれ、それぞれの祭祀に使用されたものと思われる。

墳丘の尾根筋側には掘削りを掘削し、墳丘部分を強調する。特に墳丘南側では、最大幅

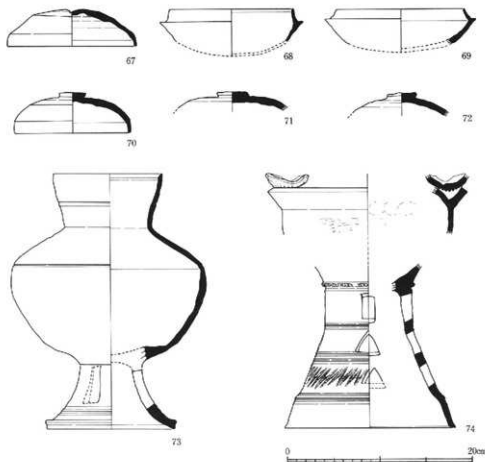


Fig. 43 墳丘上及び周辺の出土遺物（1）

約3m・深さ0.3mの規模を持つ。この掘割りが墳丘周囲を全周して周溝となっていたかどうか確かめる術もないが、本来の斜面の傾斜やわずかに旧状をとどめる墳丘西斜面の調査結果を考慮すると、周溝状を呈していた可能性は低いものとする。

最後に、数cm～十数cm大の円礫が一定量腐植土中から出土したことも指摘しておこう。当古墳一帯の地山層には同様の円礫が含まれる。墳丘の成形段階や掘割りを掘削する際に、多量の円礫が掘り出されただろう。これらを墳丘の一部（裾部か）に葺石として置いたことも十分考えられる。

このように三田古墳は、その築造当初墳頂部に形象埴輪や供獻土器を置き、墳丘裾部に円筒埴輪列を巡らせ、葺石さえも用いたかもしれない、かなり荘厳なまたかなり古風な古墳であった可能性が高い。

4. 墳丘上及び周辺の出土遺物

墳丘出土遺物は大きく供獻土器と埴輪に別れる。前者には杯・杯蓋、有蓋・無蓋高杯、という小形製品、器台、甕といった大形製品が含まれる。このうち図示できたのは、杯類や有蓋高杯の蓋、装飾器台である。

図示した杯蓋は1点のみである。(67)は体部の稜が不明瞭になっており、墳丘中央で発見された木棺直葬出土品と比較すると後出的である。杯は2点図化したにとどまったが、それぞれの立ち上がり部の形状が微妙に異なっていることが明らかであろう。

(70~72)は有蓋高杯の蓋である。この3点はいずれも淡黄褐色を呈した生焼けのような須恵器で、それに対応すると思われる高杯の脚部片も似た焼成である。このほかにも無蓋や短脚の高杯の破片が出土したが、いずれも図化できなかった。これら小形製品の破片は総数186片を数える。

中形製品は台付壺(73)と装飾付壺(74)がある。(73)は埴輪列付近でかなりの破片がまとまって出土した。壺口縁径は12cmとやや大きく、頸部と胴部には各々1条の凹線が巡る。脚部は1段3方透かしを有する。ここでは一応墳丘出土遺物に含めるが、後述するように、横穴式石室破壊時に持ち出された可能性もある。

これに対して(74)の破片はかなり散逸しており、脚部に比べ杯部や壺本体の形状はほとんど不明である。ただ杯部片によると、その口縁部付近で壺と一体化するという特徴を持つ。脚部には方形・三角・三角という透かしが3段4方に施され、それぞれは凹線帯で区分される。最下段の透かし部分にのみ複雑な波状文を施文する。本来はおそらく40cmの器高を有したであろう。

この装飾付壺は、山田邦和氏分類の「装飾付壺II-1類」に該当し、6世紀代にみられるものという¹¹⁾。これら装飾付須恵器は、和泉において「陶邑」内の窯跡・古墳・集落、信太千塚古墳群などで出土している。

甕類は体部破片が134片出土したにとどまったが、これも装飾器台同様かなり散乱しているものと思われる。偶然か、口縁部の破片は1点も出土しなかった。体部破片をみる限り、少なくとも7~8個体存在したことは確実である。

今紹介した須恵器各器種ごとの胎土・焼成に注目すると、杯類は焼成良好で一般的に青灰色であるが中に赤褐色を呈するものが含まれる。有蓋高杯は一般的に焼成不良で、甕類にも内面を中心に橙色をしたものもある。總体的には胎土は緻密であるが、器種間はもちろん同一器種内でも色調にばらつきが認められる。また完形品もしくはそれに近いもの、

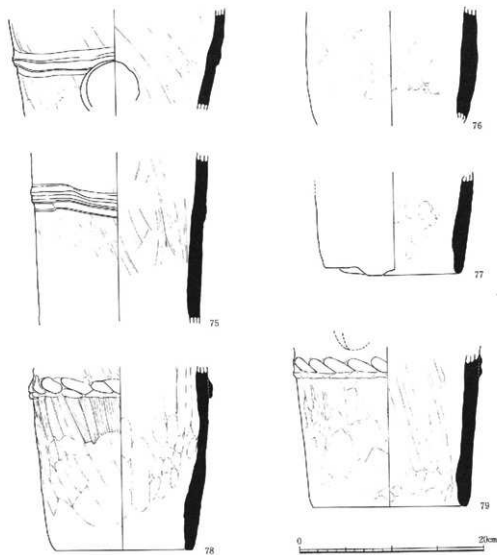


Fig. 44 墳丘上及び周辺の出土物(2)

及び破片をみる限り、大きく焼け歪んだ土器は見当たらなかった。

須恵器と並んで埴輪も墳丘周辺でかなりの破片が出土したが、実際に接合・復元まで可能なものとなると、土師質円筒埴輪の場合埴輪列出土品に限定される。これらのうち、第1段実帯が残存する個体はごくわずかではあるが、断続ナデ技法を用いる。和泉では、堺市平井塚古墳・土師遺跡、高石市大園古墳で出土したという¹⁷⁾。

また同埴輪は、その胎土の色調から大きく黄褐色のもの(909片)と赤褐色を呈するもの(2501片)に分類できる。

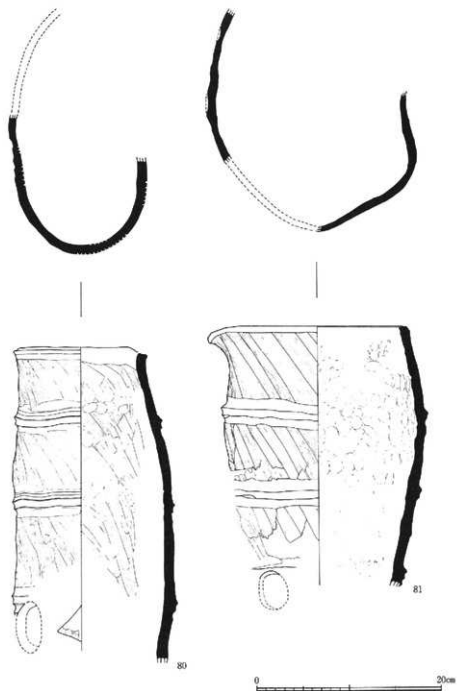


Fig. 45 墳丘上及び周辺の出土遺物（3）

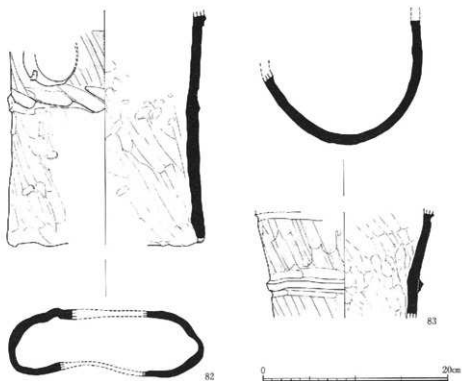


Fig. 46 墳丘上及び周辺の出土遺物（4）

図化できた土師質円筒埴輪は次の6点であるが、うち(75)は同一個体と考えられる。第1段突帯は断続ナデ技法を用いるが、京都府物集女車塚古墳例のような横位の断続ナデではなく、(78・79)のように右下がりの断続ナデである。その他のタガはごくわずか盛り上がっている程度である。外面調整は粗いタテハケのみで、最下部は板状工具を用いたナデを施す。内面は部分的にハケメの観察できる場所もあるが、一般的には指ナデや指押えが顕著に認められる。

一方須恵質埴輪は、破片数(166片)や出土位置など土師質埴輪に比べ限定されるが、2～3個体分に接合・復元することができた。いずれの個体も円形をなさず、不整楕円形をなすという点で特徴的である。調整技法は土師質埴輪と同様で、第1段突帯も断続ナデ技法を採用するなど、両者の親縁さを暗示する。内面には比較的明瞭なハケメが観察できるが、タガ接合時の指押さえ痕も認められる。また(82)のように、一つの個体の中で部位によって色調や焼成が異なるものもある。透かしは土師質と同様、2・4段目に円形透かしが施される。

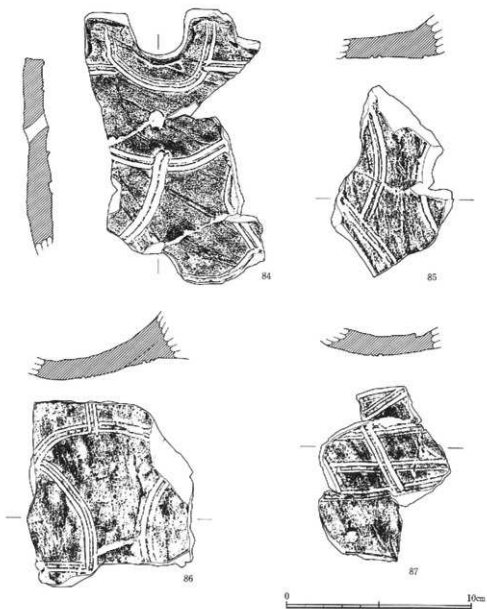


Fig. 47 墳丘上及び周辺の出土遺物（5）

形象埴輪は盾形埴輪1種類のみであるが、土師質（81片）・須恵質（14片）の両者にある。施文部分の遺存度は、いうまでもなく須恵質の方がよい。（84）の形状から推察するに、これら一連の盾形埴輪は石見型と思われる。しかし破片にまとまりがないため、全体復元までには至らなかった。

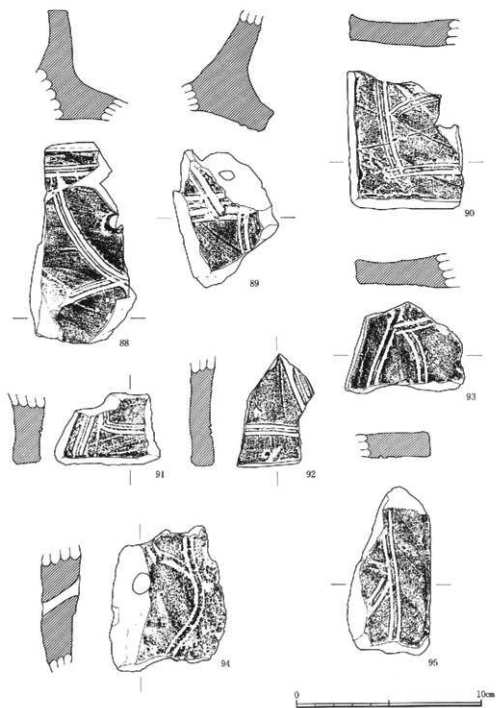


Fig. 48 墳丘上及び周辺の出土遺物（6）

第3節 第1主体

1. 墓壇掘形

本章の冒頭でも触れたように、墳丘自体が比較的低いこと、大形石材の露出がみられなかったことなどから、本古墳の埋葬施設は木棺直葬であろうとの指摘があった。調査ではその推測に従い、墳頂部の盛土を徐々に削って墓壇の輪郭を把握することに努めた。この作業に入ってもまもなく墳丘西側に黄褐色土の切り込みが発見され、横穴式石室跡の埋土であることが後に判明する。

墳頂部から約30cm削平後、墳丘中央部に長さ4.33m、幅1.96mの隅丸長方形を呈した墓壇の輪郭を確認した。その主軸方向は北西～南東で、西側の一部が先の黄褐色土によって切り込まれていた。その他に墓壇内の擾乱は認められなかったことから、この主体部が未だ乱掘を受けていないことは明らかだった。なお墓壇内の埋土は一律に赤褐色系の粘質土で、墳丘盛土が黄褐色系を呈していたこともあり、その差異は一目瞭然であった。

この墓壇は墳丘に盛土を施した後に穿たれたもので、壁面には僅かながら法面を設けてある。盛土自体がかなり堅固なため、墓壇底部に若干凹凸が認められたが、木棺を納める前にそれを補修していることも明らかとなった。

2. 木棺

墓壇内の埋土を慎重に掘り下げていくと、墓壇両端付近で灰褐色を呈した粘土塊が現われた。当初その性格について把握することができなかったが、さらに掘り進むと粘土塊の

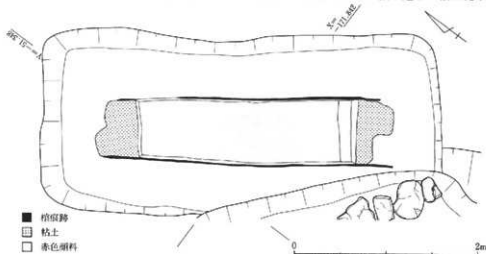


Fig. 49 木棺内赤色顔料範囲

両側縁を結ぶように淡赤色の筋を確認するに至った。このように木棺の側板痕跡を発見したことによって、先の粘土塊が棺小口に置かれたものであると理解したのである。この側板の腐朽はかなり進展していたため、結局棺底から約20cm上方でしか見出すことができなかった。しかしこの粘土塊の存在から、側板は少なくとも30cmの高さを有していた可能性がある。さらにこの木棺には、側板のみならず平坦な底部にも赤色顔料が塗布されていた。その量を計量する余裕もなかったが、底部の方が優るようだ。なお小口板については粘土塊と接していた関係か、その痕跡をついに発見することができなかったが、頭側側の粘土小口側に淡赤色を呈する部分を確認することができた。これが小口板の痕跡を示すものかもしれない。

後に詳述するが、刀剣類の柄が南東に向いていたことから、本棺に納められた遺骸の頭位は南東であると推定した。棺底を観察すると、頭位に幅12cmの木質痕跡を有するくぼみを確認した。当初枕の痕跡かと考えたが、左右の長さは棺外にまでおよび約116cmを測った。よって枕とは考えにくい。今回検出した「枕木」状痕跡は、高石市富木車塚古墳前方部第Ⅲ埋葬施設例に類似したものと推測されるが¹³⁾、この第Ⅲ埋葬施設例では両小口付近にあることから、本例とは機能・用途が異なっていたかもしれない。また棺底は一樣に平坦ではあるが、南東に比べ足下と考えられる北西側は約10cmほど低くなっていた。

最後に棺蓋の痕跡は、調査中平面的に把握することはできなかったが、南東側小口の粘土塊を観察したところ、幅約1cmの中央の窪んだ棺蓋痕跡を発見した。北西側小口では、粘土塊の検出時に適切な処置を施さなかったため、残念ながら痕跡を見出すことはできなかった。さらにこれら粘土塊を棺主軸に沿って半裁し観察すると、小口を支える粘土塊の他に、棺蓋の上から別の粘土が置かれていることをつきとめた。

以上の状況から墓墳内の木棺埋納状況を復元すると次のようになる。まず墓墳を掘り、底部を平坦にするなど成形する。事前に赤色顔料を塗布した側板を立てかける。この時底板にも赤色顔料を塗る。小口には粘土塊と顔料を塗った小口板を置いて側板の内傾を防ぎ、棺材の周囲には側板の高さまで裏込め土を充填する。このようにして遺骸埋葬施設を整え、遺体や副葬品を納め、棺に蓋をして小口部分にのみ粘土を置く。最後に頭側の棺外に副葬品の土器類や玉を供え、墓墳を埋め戻しさらに盛土を施して墳丘を整える。

木棺の計測値は、側板長315cm、側板幅（棺高）30cm、側板厚3cm、頭部小口幅（内法）71cm、足先小口幅（内法）65cm、内法長233cm～242cm、頭部と足先の比高差10cmである。

3. 遺物出土状況

墓室内・木棺内それぞれから多量の副葬品が出土した。以下墓墳・棺の順にみていこう。

墓室内で発見した副葬品は、須恵器杯・杯蓋各10点、同平底瓶2点、同高杯3点、土師器壺1点、製塩土器1点及び土玉である。これらは墓墳南東隅付近（頭側側）に集中して出土した。

墓墳南東隅の北側では須恵器杯・杯蓋が合わさった状態で10組と、須恵器平底瓶が1ヵ所にかたまっていた。杯類はその出土状態から、まず7組分を供え、その上に3組置かれたと考えられるが、棺の腐朽と土圧により裏込め土がそこへ流入した結果、傾斜した状態での出土となった。このうちの1組の中に製塩土器が入っていたが、他のセット内には一切遺物は含まれていなかった。

墓墳南側では須恵器高杯3点、同平底瓶1点、土師器壺1点が副葬されていた。しかし土師器壺は、木棺小口の粘土上に納められていたため、取上げ時に細片化してしまい復元不可能となった。

この両土器群の間から土玉が出土した。本来は数珠状に連なっていたらしく、ごく限定された部分に幾重にも重ねられた状態であった。残念ながらそのいくつかは、発掘道具の犠牲となり細片化してしまった。そこで完形品1点あたりの平均重量を算出し、一部破損した土玉に破損分の重量を加え、残った破片重量を平均重量で割ることによりその個体数を導きだした。その結果当初土玉は、少なくとも201点あったと推定するに至った。

棺外出土遺物が土器・装飾品であったのに対し、棺内出土遺物は専ら武器類であった。それらは、遺骸右側縦列に大刀・剣が、左側に鉄鎌群が、棺中央足下寄りに鹿角装刀子がそれぞれ置かれてあった。

当初環頭部分は、木棺の名残と思われる木質に被われていたが、柄頭部分が早くから折れていたらしく、折れ目はかなり腐朽し容易に接合できる状態ではなかった。刀身部分は完全に錆化し、鞘から抜き出すことは不可能である。また鞘尻部分は腐食してしまい、この部分にあったと思われる青銅製の飾金具のみが発見された。

それに比べ剣の柄頭や鞘はなく、木質がかるうじて錆に付着して遺存していた程度であったが、剣自体はほぼ完全に残っていた。ただ土圧のためか、剣先付近はやや反り返っていた。刀剣とも、鞘などの木質の遺存度は棺底側の方がおおむね良好であった。

34本束ねて副葬してあった鉄鎌群は胡籬を用いず、1本の片刃式の長頭鎌を折曲げて台のようなものを作り、散らばるのを避けたらしい。ゆえに束ねた鉄鎌群は、いずれも基部